

日本海沿岸東北自動車道(国道7号朝日温海道路)関係  
発掘調査報告書 2

大 川 城 跡

2 0 2 2

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道(国道7号朝日温海道路)関係  
発掘調査報告書 2

おお かわ じょう あと  
大 川 城 跡

2 0 2 2

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

日本海沿岸東北自動車道（日沿道）は、新潟県から青森県の日本海側主要都市を結ぶ延長約322kmの自動車専用道路です。このうち、新潟県村上市川端の朝日まほらばICから山形県鶴岡市大岩川のあつみ温泉ICまでの40.8kmは、2013年に「朝日温海道路」として事業化されました。日沿道は、日本海側に高速交通・通信体系等を整備することにより、社会、経済、生活、文化等の諸機能をネットワーク化し、新たな国土の主軸を形成する「日本海国土軸」構想の一翼を担う道路として、早急な整備が求められています。

本書は、朝日温海道路の建設に先立ち、2021年度に実施した大川城跡発掘調査の報告書です。大川城は、戦国期に新潟県北端付近の大川流域を支配した大川氏の居城です。調査の結果、15世紀後半から16世紀前半の青花が出土したほか、詳細な年代は不明ですが、谷奥の溜池から丘陵先端の水田に水を引くための岩盤を割り貫いた溝が発見されました。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた村上市教育委員会、並びに地元住民の方々、そして、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2022（令和4）年12月

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 妹尾 浩志

## 例　　言

- 1 本書は、新潟県村上市府屋に所在する大川城跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道7号朝日温海道路建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所（以下、国交省）から公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査財団（以下、埋文事業団）が受託したものである。
- 3 埋文事業団は、発掘調査を株式会社島田組新潟営業所（以下、島田組）に委託して、2021年度に実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して新潟県埋蔵文化財センターで保管している。
- 5 遺物の注記は、調査年（西暦下二桁）+大川城跡の略記号「21 大川」とし、出土地点や層位を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 掲載遺物の番号は、種別にかかわりなく通し番号とした。本文・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を本文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は島田組に委託した。デジタルトレースとDTPソフトによる編集を行った後、不二出版が最終的な編集を行い、印刷した。
- 10 本書の執筆は春日真実（埋文事業団）、安孫子雅史・瀧口泰孝・丹生泰雪（島田組）が当たり、編集は丹生が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
春日　真実：第Ⅰ章1・2-B、第Ⅱ章1、第Ⅲ章1  
安孫子雅史：第Ⅰ章2-A・3・4、第Ⅳ章2-C  
瀧口　泰孝：第Ⅱ章2、第Ⅲ章2、第Ⅳ章1・2-A・B、第Ⅵ章  
丹生　泰雪：第Ⅴ章
- 11 図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館をいう）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々からご教示、ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる（敬称略 五十音順）。

坂井秀弥　　村上市教育委員会　　横山勝栄

## 目 次

<b>第Ⅰ章 序 説</b>	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	3
A 試掘確認調査	3
B 本発掘調査	3
3 調査体制	4
4 整理作業	4
<b>第Ⅱ章 遺跡の位置と環境</b>	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
<b>第Ⅲ章 調査の概要</b>	9
1 グリッドの設定と地区名	9
2 基本層序	9
<b>第Ⅳ章 遺 構</b>	11
1 遺構の概要と記述の方法	11
A 概 要	11
B 遺構の記述と表記方法	11
2 遺構各説	11
A 上層遺構	11
B 下層遺構	12
C 谷状地形	13
<b>第Ⅴ章 遺 物</b>	16
1 概 要	16
2 遺物各説	16
<b>第VI章 ま と め</b>	17
《引用・参考文献》	19
《観察表》	20

## 挿図目次

第 1 図 国道 7 号朝日温海道路の法線と 遺跡の位置 1 .....	1	第 6 図 周辺の遺跡 .....	7
第 2 図 国道 7 号朝日温海道路の法線と 遺跡の位置 2 .....	2	第 7 図 グリッド設定図 .....	9
第 3 図 作業風景 .....	3	第 8 図 基本層序柱状図 .....	10
第 4 図 試掘トレンチ位置図 .....	4	第 9 図 SD4・4b 分岐部 .....	12
第 5 図 大川城跡周辺の地質図 .....	5	第 10 図 谷状地形分布図 .....	14
		第 11 図 溝の掘削工程 .....	17
		第 12 図 ふる城・藤懸り館 村上ようがい（村上城） ..	18

## 表目次

第 1 表 周辺の遺跡一覧表 .....	6
----------------------	---

## 図版目次

### 【図面図版】

- 図版 1 大川城跡周辺図
- 図版 2 現況地形測量図
- 図版 3 上層遺構平面図
- 図版 4 下層遺構平面図
- 図版 5 下層遺構分割図（1）
- 図版 6 下層遺構分割図（2）
- 図版 7 下層遺構分割図（3）
- 図版 8 下層遺構分割図（4）
- 図版 9 下層遺構分割図（5）
- 図版 10 下層遺構分割図（6）
- 図版 11 調査区断面図・エレベーション図
- 図版 12 遺構断面図（1）
- 図版 13 遺構断面図（2）
- 図版 14 遺構断面図（3）
- 図版 15 遺構断面図（4） 遺物実測図

### 【写真図版】

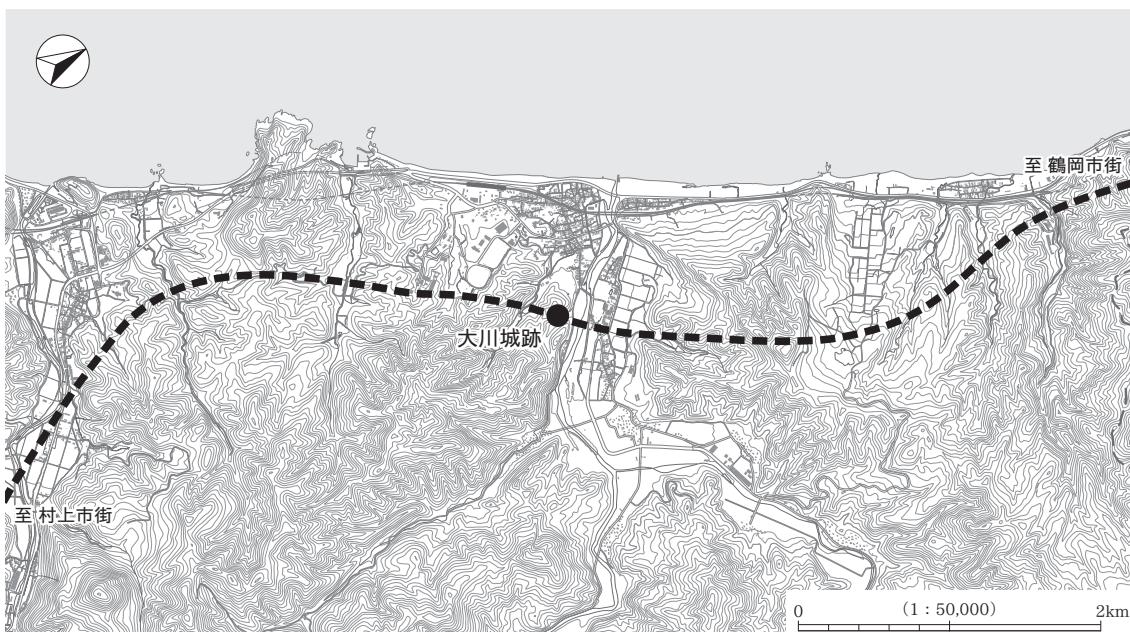
- 図版 16 越後国郡絵図
- 図版 17 大川城跡の位置
- 図版 18 空中写真
- 図版 19 調査区全景、空中写真
- 図版 20 着手前、基本層序
- 図版 21 SF1、SD2、SD3、SD4
- 図版 22 SD3、SD4
- 図版 23 SD3、SD4、SD4b
- 図版 24 谷 1 部 SD3、SD4、SD4b
- 図版 25 SD5、SD6、SF7
- 図版 26 谷
- 図版 27 岩盤検出状況、岩質境界部
- 図版 28 溝池、出土遺物

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

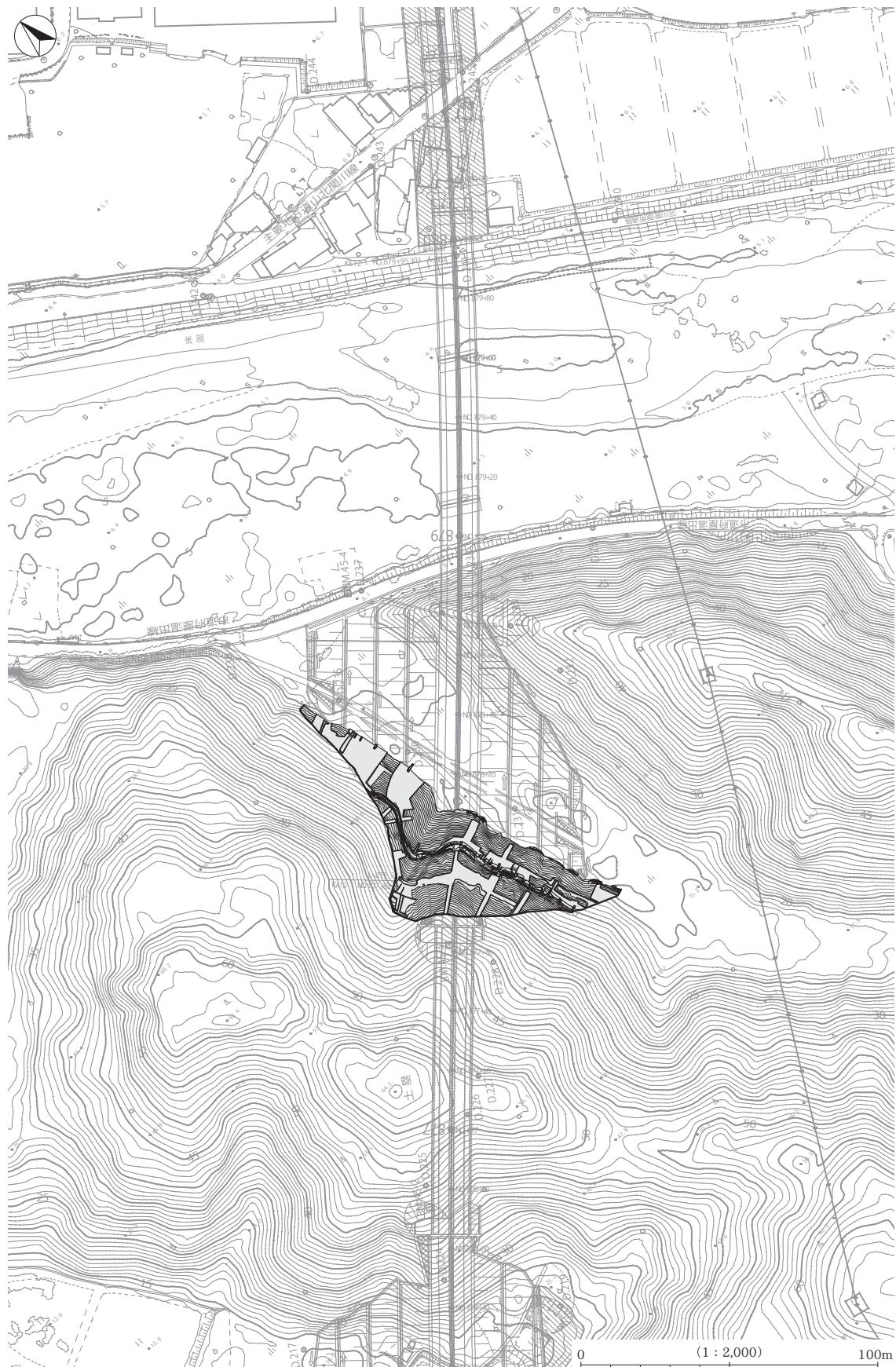
日本海沿岸東北自動車道（日沿道）は、新潟県・山形県・秋田県の主要都市を結び青森県に至る延長322km（新潟空港IC～青森IC）の自動車専用道路である。日沿道は、日本海側に高速交通・通信体系等を整備することにより、社会、経済、生活、文化等の諸機能をネットワーク化する「日本海国土軸」の一翼として、早急な整備が求められている。新潟県内においては、新潟空港ICから朝日まほろばICの区間が2011年3月までに供用されている。朝日まほろばICから山形県鶴岡市のあつみ温泉ICまでの延長40.8kmの区間は、2013年に「国道7号朝日温海道路」として事業化された。これにより、国交省と新潟県教育委員会（以下県教委）との間で建設用地内における埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

村上市府屋地区には周知の埋蔵文化財包蔵地である大川城跡が所在し、2020・2021年度に県教委による試掘確認調査が行われた。このうち大川城跡が所在する丘陵の北東斜面にあたる道路法線杭No.878周辺では中腹に犬走り状のテラスが確認できた。周辺住民への聞き取り調査により、このテラスはイトマ沢の奥にある溜池から丘陵先端に存在した水田への導水施設であることがわかった。トレンチ調査の結果、遺物は出土しなかったが、導水施設が戦国期まで遡る施設（城道・胸壁）を改変した可能性があり、築造が近世以降だとしても農業遺産として貴重なものであると判断され、1,500m<sup>2</sup>の発掘調査が必要であるとした〔加藤ほか2021〕。試掘・確認調査の結果を受け、国交省は令和3年2月25日付国北整羽二工第234号で県教委に対し調査必要範囲の南端1,500m<sup>2</sup>について本発掘調査を依頼し、県教委は令和3年3月8日付教文第1406号で埋文事業団に調査を依頼した。



第1図 国道7号朝日温海道路の法線と遺跡の位置1  
(国土地理院基盤地図(2021年10月1日更新)を改変)

# 1 調査に至る経緯



第2図 国道7号朝日温海道路の法線と遺跡の位置2

(原図 国交省北陸地方整備局新潟国道事務所作成 1:1,000)

## 2 調査経過

### A 試掘確認調査

試掘確認調査は2020（令和2）年9月17日・18日に実施した。これは2020（令和2）年5月29日及び6月29日に実施した確認調査で、道路法線杭No.878付近の斜面で犬走り状テラスの土地改変を確認したためであった。調査方法はテラスを横断するトレンチを設定し人力による掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、山側を切土し、その排土を谷側へ盛土することでテラスを形成していることが分かったが、年代を特定する遺物は出土しなかった。また、テラスの山側部分には溝が掘られていた。地域住民の話によると古館古城址公園に以前あった水田への用水施設であることが明らかとなった。この施設がいつまで遡れるかは、文献調査では明らかにできなかったが、有識者に指導を仰いだ結果、中世の山城の施設を改変してつくられたもの可能性があり、仮に造成が近世以降になるとしても農業遺産として貴重であり、1,500m<sup>2</sup>の本発掘調査が必要であると判断した。

### B 本発掘調査

本発掘調査は、2021（令和3年）5月6日から10月14日に実施した。当初の本発掘調査対象面積は1,500m<sup>2</sup>であったが、立木伐採後の現地形の観察の結果、丘陵裾付近までの2,551m<sup>2</sup>を本発掘調査の対象とするとして、事業団・県教委・国交省が協議を行い決定した（第4図）。

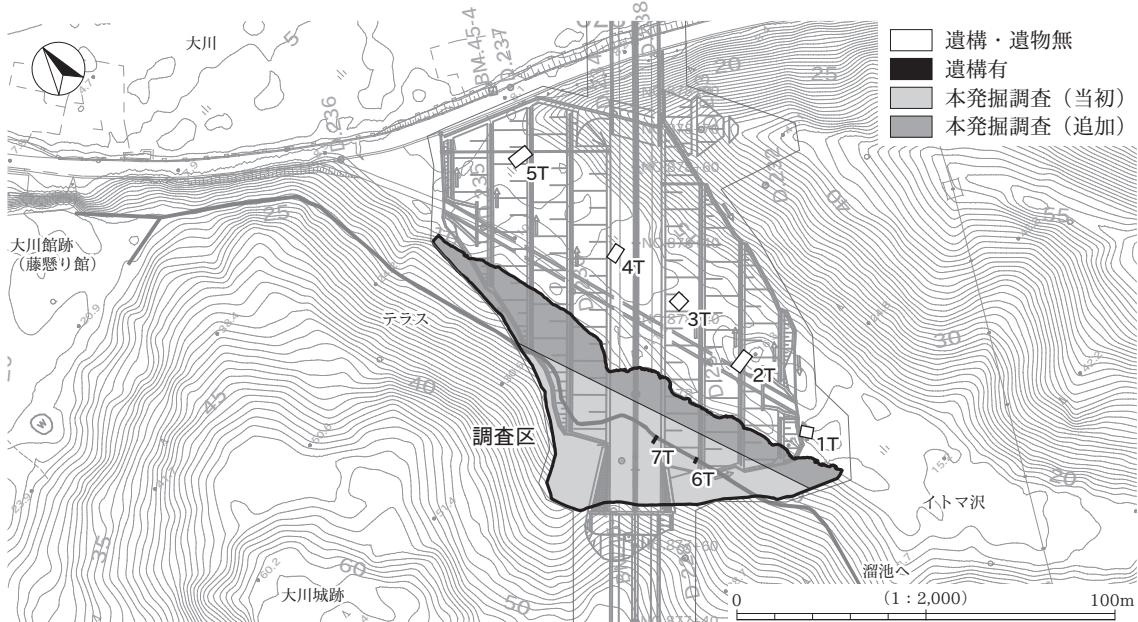
倒木を除去し現地形を測量した後に掘削作業を開始した。調査対象地は急斜面のため掘削用重機が侵入できず、掘削は人力で行った。調査区内の比高差が大きいため、昇降階段や転落防止のネットを設置し、掘削時には安全帯を着用し作業を行った。昇降階段や転落防止ネットは調査の進展に応じ適宜移動した。掘削した土は人力・ベルトコンベアで、徐々に下位に移動させ、場外搬出にはバックホー・クローラーダンプを使用した。土層観察用のベルトを適宜設定し、遺構はトレンチを設定して土層堆積状況を確認した後に掘削した。

遺物は出土点数が少ないこともあり、トータルステーションで出土地点を測量し、層位を記録して取り上げた。写真は土層観察用ベルトや遺構の断面、遺構完掘状況などを画素数2,000万画素以上、撮像素子（イメージセンサー）フルサイズ（36×24mm）で光学ファインダーを備える一眼レフタイプのデジタルカメラを用い、①撮影条件等を記入したホワイトボードを写し込んだもの、②カメラの前に撮影対象と同角度でグレーカードをかざしたもの、③グレーカードを外した適正露出のもの、④③と同一条件で撮影したもの（バックアップ用）を4枚1組で撮影した。また、9月14日にラジコンヘリを用いた航空写真撮影と、高所作業車を用いた写真撮影を行った。断面図はトータルステーションを用いて作成し、平面図は写真測量を基本とし、補足的にトータルステーションを使用した。

航空写真撮影を実施した9月14日以降は、追加のトレンチ調査や基本土層断面図の作成、平面図の補足を行った後、写真や図面の確認を行い10月14日に調査を終了した。



第3図 作業風景



第4図 試掘トレンチ位置図  
(原図 国交省北陸地方整備局新潟国道事務所作成 1:1,000)

### 3 調査体制

大川城跡の試掘確認調査と本発掘調査の体制は以下のとおりである。

#### 試掘・確認調査（2020（令和2）年度）

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 稲荷善之）
調査	新潟県教育庁文化行政課
総括	佐藤美由紀（文化行政課長）
管理	樋山 光英（文化行政課 課長補佐）
調査指導	渡邊 裕之（文化行政課 埋蔵文化財係長）
調査員	加藤 学（文化行政課 専門調査員） 塙野 寛人（文化行政課 文化財調査員）

#### 本発掘調査（2021（令和3）年度）

調査主体	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	清野 一善（事務局長）
管理	五十嵐大介（総務課長）
庶務	小野澤浩嗣（総務課班長）
監理	春日 真実（調査課長）
調査組織	株式会社島田組
調査担当	丹生 泰雪（調査室 調査員）
現場代理人	岩佐 篤志（工事部 職員）
調査員	安孫子雅史・瀧口 泰孝（調査室 調査員）

### 4 整理作業

遺物の洗浄は現地作業所にて本調査と並行して実施した。本格的な整理作業は2021（令和3）年12月1日～2022（令和4）年3月31日まで島田組新潟営業所で行った。整理体制は本発掘調査に以下の2名を加えたものである。

整理補助員 江堀純子・小林裕介（株式会社島田組 整理補助員）

# 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

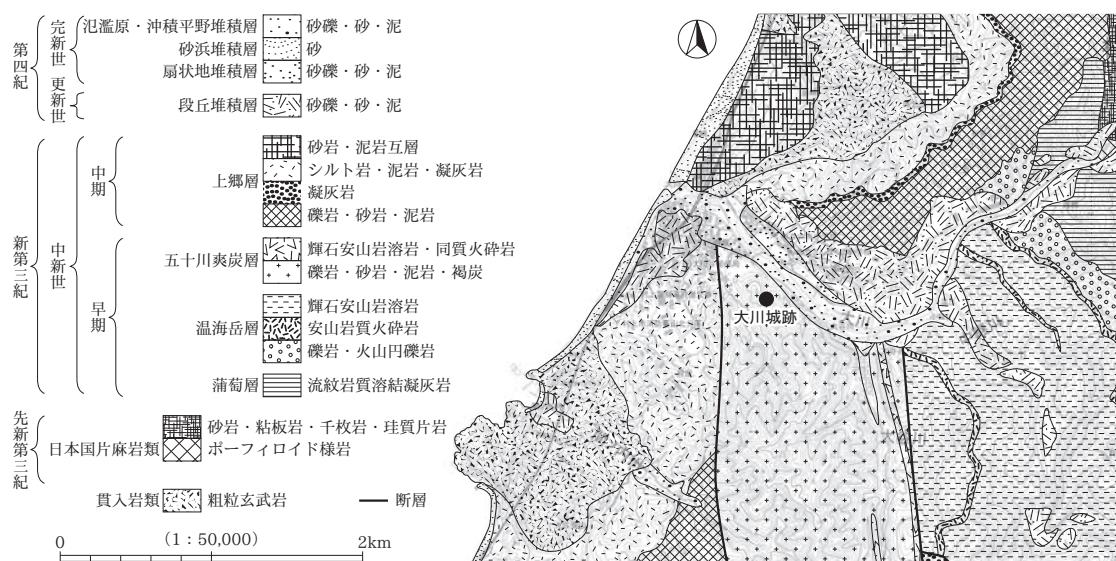
## 1 地理的環境

村上市は新潟県の最北に位置し、北は山形県鶴岡市、東は山形県西川町・小国町、南は関川村・胎内市と接し、西は日本海に面する。面積は約1,174km<sup>2</sup>で、県域の約1割を占める。市域の大半は山地であり、平地は飯豊山系・朝日山系を水源とする河川の流域に広がる。市内は国道7号・JR羽越本線が縦貫し、越後と庄内地方を結んでいる。

大川城跡は2008年の村上市との合併以前は山北町に属しており、大川下流左岸に位置している。1948(昭和23)年米軍撮影の写真(図版17)で大川下流をみると、大川右岸は平地が広く左岸は狭い。また、右岸には多くの水田が確認できるが、左岸は府屋地区の街並みの南側に広がる平地の一部と、ここから東方にのびる谷などに水田が確認できるが、右岸と比較すると面積は少ない。「藤懸り館」跡地に作られた水田は、府屋地区では貴重な水田であった。

大川城跡の所在する府屋地区は現在も村上市山北支所が所在し山北地区の中心地域である。慶長二(1597)年作成と伝える米沢上杉家蔵の瀬波郡絵図には「大川町」が描かれており(図版16)、現在の府屋地区が大川城下に形成された「大川町」を基に発展し、現在に至っていることがわかる〔坂井1991〕。

府屋地区の南東に位置する古館山・高館山に大川城跡は位置し、古館山西裾に広がる段丘上には「藤懸り館」が所在する。城跡の北側を大川が流れ、「藤懸り館」から海岸までは約600m、調査地点から海岸までは約900mである。表層地質図温海・勝木〔新潟県農地部農村総合整備課1992〕では、調査地点を含む古館山・高館山は中新世早期五十川夾炭層の礫岩・砂岩・泥岩・褐炭に分類され、東西の丘陵裾付近には断層が確認できる(第5図)。また、「藤懸り館」が所在する地点は中新世中期上郷層のシルト岩・



第5図 大川城跡周辺の地質図  
(1992(平成4)年発行 新潟県表層地質図 温海・勝木を改変)

## 2 歴史的環境

泥岩・凝灰岩に分類されている。

## 2 歴史的環境

ここでは第6図に示した周辺の遺跡について記述する。

旧石器時代の遺跡は、大川城跡の所在する旧山北町地域（以下山北地区）ではまだ確認されていない。

縄文時代になると、前期の遺跡では府屋遺跡（4）が知られている。大川河口の砂丘上に位置し、住居跡等が確認されている。東北地方南部の吹浦式土器が多量に出土した〔新潟県 1983〕。縄文時代後期～晩期では上山遺跡（7）が知られている。大川右岸の雨乞立山裾部の台地上に位置し、炉跡、住居跡、石匂遺構が確認され、大洞A'式土器が出土している。また、巻貝型土製品、足型付土製品が出土した。巻貝型土製品はきわめて写実的で精巧なものであり、全体に水銀朱と考えられる赤色塗料で塗彩されていた。足型付土製品は、楕円形土板に1歳前後と推定される幼児の足跡を押捺したものであり、どちらも、国の重要文化財に指定されている。このような特殊な土製品は東日本にみられ、前者は宮城県山ノ下遺跡・茨城県堆塚貝塚、後者は北海道美々5遺跡・青森県平遺跡にも類例がみられる〔上原 1961・新潟県教育委員会 1969・新潟県 1983〕。

弥生時代の遺跡は間ノ内遺跡（5）が知られており、山草荷式土器が採集されている〔山北町史編さん委員会 1982〕。また上山遺跡からも弥生時代中・後期の土器が出土している〔新潟県 1983〕。

古墳時代の遺跡は当地域では畠地から杯等の須恵器片が採集されていることが『山北町史』に紹介されているが遺跡の詳細は不明である〔山北町史編さん委員会 1987〕。昭和30年代に脇川の字丸山に在る小山が脇川古墳と呼ばれたことがあるが、昭和37年に斎藤忠が調査した結果、自然の小山であり前方後円墳とは認めがたいと否定された〔山北村教育委員会 1965〕。

1968年に山北地区に隣接する山形県温海町鼠ヶ関で古代鼠ヶ関跡の発掘調査がおこなわれた。その際、推定域の範囲内であった旧山北町域も調査され、伊呉野遺跡（8）では関戸に関連すると考えられる10～11世紀の製鉄遺構等の生産遺構が確認された。その後、山北地区では古代の遺跡は確認されていなかったが、2020年に竹ノ下遺跡（6）で本発掘調査がおこなわれ古代から中世の遺構・遺物が出土した。古代末から岩船郡には小泉荘が成立し、当地域もその一部となる。今後大川右岸の河岸段丘での調査が進み当該期における集落跡の様相が明らかになることが望まれる。

中世以降戦国期にかけて全国各地で山城が築城される。山北地区もまた出羽国との国境防衛の点から当然のごとく複数の山城が築城された。以下に山北地区に築かれた代表的な山城を挙げる。

No	遺跡名	所在地	時代
1	大川城跡	府屋字古館	南北朝・安土桃山
2	大川館跡	府屋字古館	南北朝・安土桃山
3	高岩寺前墓地五輪塔	府屋	江戸
4	府屋遺跡	府屋字上山	縄文
5	間ノ内遺跡	府屋字間ノ内	弥生
6	竹ノ下遺跡	堀ノ内字竹ノ下	古代・中世
7	上山遺跡	堀ノ内字上ノ山	縄文
8	伊呉野遺跡	伊呉野	中世
9	法妙遺跡	中浜字法妙	縄文
No	遺跡名	所在地	時代
10	塔ノ下城跡	塔下字後山	南北朝
11	天狗峰城跡	荒川口字金平	不明
12	荒川口城跡	荒川口字ワラビリ	中世
13	大伝寺跡	下大藏字屋敷	中世
14	三条山城跡	垣之内字スミカマ	不明
15	垣ノ内遺跡	垣ノ内字道上	縄文
16	立島城跡	立島字松木平	中世
17	中津原遺跡	中津原字宮ノ台	縄文

第1表 周辺の遺跡一覧表



第6図 周辺の遺跡  
(国土地理院基盤地図（2021年10月1日更新）を改変)

## 2 歴史的環境

塔ノ下城跡（10）は、城域は明確ではないが金峰神社と長誓寺の旧地が主要部であると考えられている〔山北町史編さん委員会 1982〕。天狗峰城跡（11）は、山上を掘り切って曲輪としており、塔ノ下城と荒川口城跡（12）との連絡に重要な役割を果たしていたと考えられるが、史料は確認されていない〔山北町史編さん委員会 1982〕。荒川口城跡（12）は、中継川と荒川に挟まれた山系の突出部に独立した小丘の上に位置しており、約 30m の楕円状の平坦地の周りに階段状にいわゆる帯郭が付設されている。4 条の空堀が確認されている〔新潟県教育委員会 1987〕。三条山城跡（14）は、勝木川右岸の標高 311m の山頂に位置する。山頂の南面に 2 段の平坦面が広がる〔山北町史編さん委員会 1982〕。立島城跡（16）は、南北に 20m、東西に 10m 程 L 字状に伸びた曲輪が中心で、北面に曲輪が 2 ~ 3 段、階段状に広がり、背後の山に続く尾根には空堀が 1 本確認されている。立島兵庫守の居城として伝わるが築城年代を示す史料は残っていない〔新潟県教育委員会 1987〕。

上述の山城跡はいずれも踏査によって曲輪・堀切など種々の遺構が確認されてきたが、発掘調査は行われておらず、文献史料に残された僅かな記述をのぞいて、築城から廃城までの経緯等の詳細は不明である。

その中で今回の調査地である大川城跡（1）は北端から南端まで全長約 1,000m にわたる規模を有しており（図版 1）、他と比較して規模も大きく、北端に隣接する台地上に位置する平時の居館である「藤懸り館」、主郭をはじめとして堀や切崖で区分された曲輪には堅固な土塁をめぐらせた「古館山」、その背後に後方警戒を兼ねた詰めの城と思われる「高館山」で構成されていた。これは「軍事的緊張が高まった国境に、繩張り・防衛施設が発達した城」として構築された「境目の城」〔早川 2017〕に該当するといえよう。

また文献には、今も府屋に法灯を伝える高岩寺を建立したという大川三郎二郎家貞、上杉謙信に従い川中島の合戦で討死した大川忠秀といった大川氏の所領であったことも記述が残されている。また慶長 2（1597）年までに作成された越後国郡絵図の瀬波郡絵図に城は村上城（むらかみ要害）、平林城と大川城の 3 城のみ描かれていることから瀬波郡内で中核城の一つであったことが窺える。その絵図には大川城は「ふる城」と記載されていることから、廃城とまでは言わずとも既に機能を停止しており藤懸り館のみ居館として維持されていたことが考えられる〔坂井 1991〕。そして翌年の慶長 3 年に上杉家の会津移封に従い大川氏が当地を去ると大川城は廃城となる。その後、村上藩に組み込まれ、最後は幕府領とその支配者が変わりゆく中で居館跡はいつしか水田となり、明治を迎える。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 グリッドの設定と地区名

グリッドは、平面直角座標系Ⅷに沿って10mの方眼を組み大グリッドとした。大グリッドの呼称は、北西隅の1A(X: 279510.000, Y: 90810.000)を起点に東へアラビア数字で1・2・3…、南へアルファベットの大文字でA・B・Cとした記号を組み合わせ、1A・2A…のように表記した。また、大グリッドを2m四方に25等分して北西隅を1、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで、「1A10」のように表記した(第7図)。

### 2 基本層序

大川城跡は、大川左岸に位置する古館山から高館山にかけての約1000mにわたる尾根上に郭と堀切を配した山城である。調査区は古館山北東辺の断崖部分に位置しており、すでに一部現況で凝灰岩の岩盤が露出していた。基本層序はI～IV層に大別した(第8図)。同一層であっても地点によって土質・色調に多少の差異がある。

I層：黒色腐葉土(10YR3/1)、表土

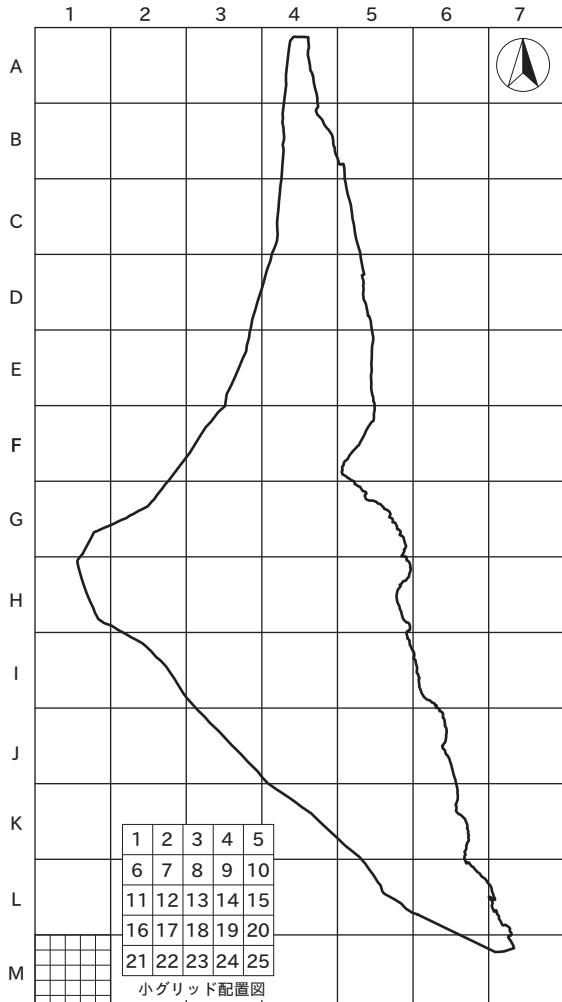
II層：暗褐色～にぶい黄褐色土(10YR3/3～10YR5/3)、褐色森林土

III層：褐色～灰色砂礫土(10YR4/4～7.5Y4/1)

IV層：岩盤層 磯岩からなる基盤地層であり遺構検出面。

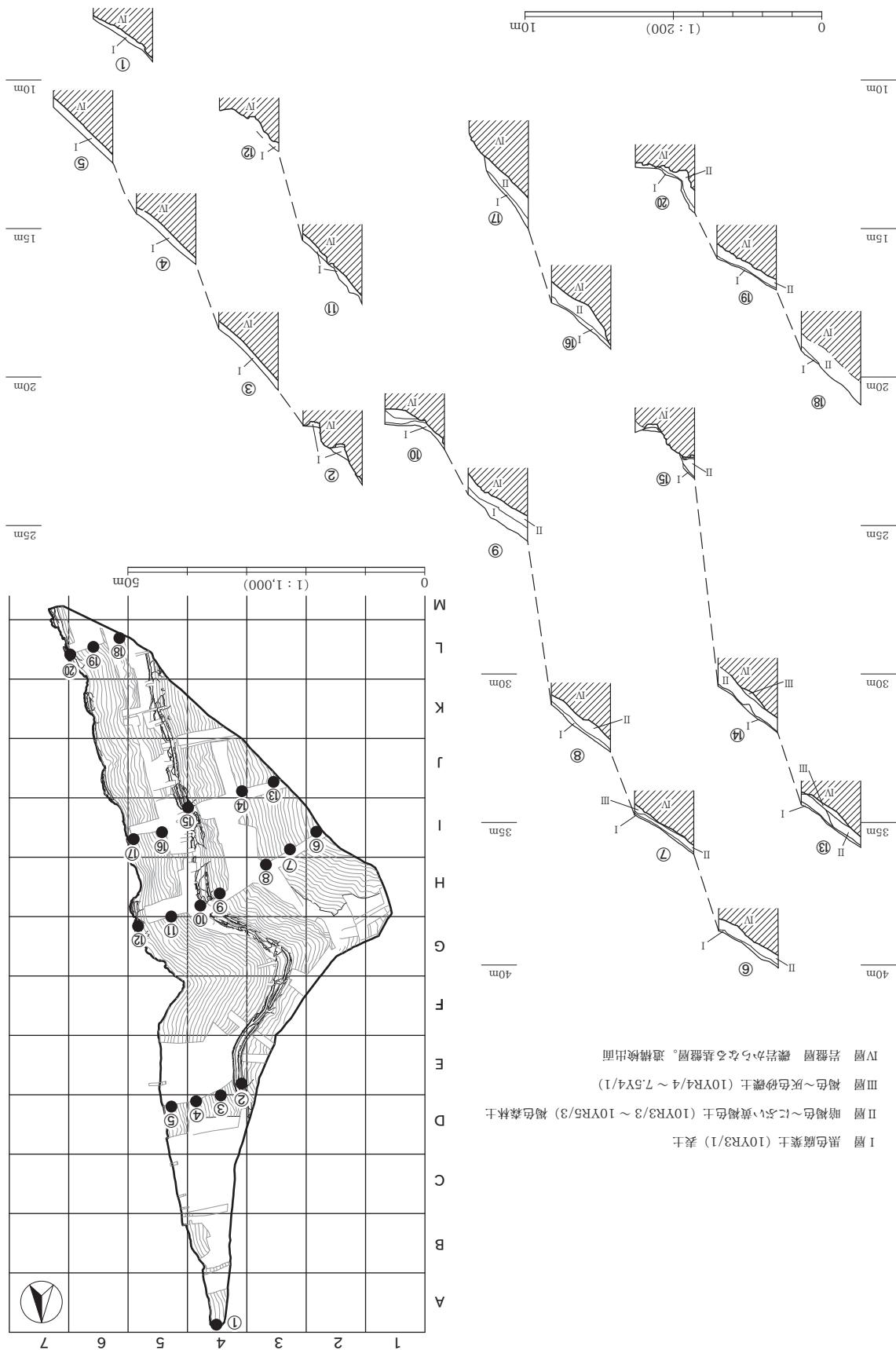
III層およびIV層を検出面とした。

調査区は平均40°の傾斜角度の断崖部のため、腐葉土の表土層とその分解が進んだ褐色森林土層が約30cmの厚さで堆積する程度で、その下層は基盤層である岩盤が風化し崩落したものと考えられる砂礫層、岩盤層と続く。調査区の大部分で岩盤層が露出したこと、越後国瀬波郡絵図に岩山に築かれた城として描かれている「ふる城」の往時の様相を垣間見ることとなった。



第7図 グリッド設定図

第8图 基本露布柱状图



## 第IV章 遺構

### 1 遺構の概要と記述の方法

#### A 概要

今回の調査は、トンネル開口部予定地の急な斜面地における発掘調査であり、山城跡とはいいうものの建物をともなう曲輪・虎口などの平坦部の調査ではなかった。そのため想定される遺構は、横山氏の縄張り図に記された尾根付近の堀切〔横山ほか2007〕や試掘調査時に確認した犬走り状の用水路関連の農業遺産遺構など〔加藤ほか2021〕であった。しかし、大川城の防御施設として明確に堀切と認められる遺構は検出されなかつた。検出遺構は、犬走り2条、溝4条、谷状地形を10か所であり、これらの内、調査着手前の時点で確認していたSF1、SD2を上層遺構とし、それらの下層に位置するSD4・4b、SF7、SD4に先行するSD3、同様の構造であるSD5・6を下層遺構として調査した。

遺物はSD2から数点出土したが尾根上方からの混入物と思われるものであり、その他は表土中のものを採集したのみであるため、検出遺構の年代は不明である。

#### B 遺構の記述と表記方法

遺構の記述は本文のほか図面図版・写真図版・挿図を用いる。図面図版は、遺構全体図・分割図・断面図で構成される。また、写真図版は、図面図版の掲載順に合わせて作成した。なお、通例であれば遺構各説では、遺構名の後に（図版〇〇）とその遺構とかかわる図版番号を示すが、今回の検出遺構はいずれもほぼ全ての図版にまたがるため（図版3・4）、個別に表記はせず、本文中で特徴的な部位の解説の際に有効な図版番号、挿図番号を示すこととした。

遺構種別の表記は、略号を用いて溝「SD」、犬走り「SF」とした。遺構ではないが、検出した谷状地形についても「谷」として本章で述べることとする。

遺構の計測値は、最大幅、及び検出面からの最深部を示した。

遺構同士が重複する場合、新旧の表示は、本文中では「切る」、「切られる」、「新しい」、「古い」と表現し、観察表では不等号を用いて「新 > 古」とした。土層の色調は、『新版標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所2004〕を使用した。

### 2 遺構各説

#### A 上層遺構（図版3・11～13・20・21）

##### 1) 溝

###### SD2

SD4を踏襲して活用されてきた農業用水田と考えられる溝で、調査前の時点でも埋没しきらずに窪みを残していた。北部ではSD4の遺存状態が良好であるため、一部SD4そのものを利用している。底面標高値は、グリッド5L14で21.718m、グリッド3D20で21.643mを測る。谷1付近では崩落が著しい。

近世以降の陶磁器、砥石が出土したが、覆土は腐葉土であり現代の清涼飲料水の空き缶なども確認した。これは尾根上方からの混入物と思われる。年代は特定できない。

## 2) 犬走り

### SF1

SD2に並走するもので、暗褐色土で成形された盛土層。谷1部や北側では大半が崩落した状態であった。標高値は、グリッド5L14で21.943m、グリッド3D15で21.769mを測る。

## B 下層遺構(図版4~13・21~24)

### 1) 溝

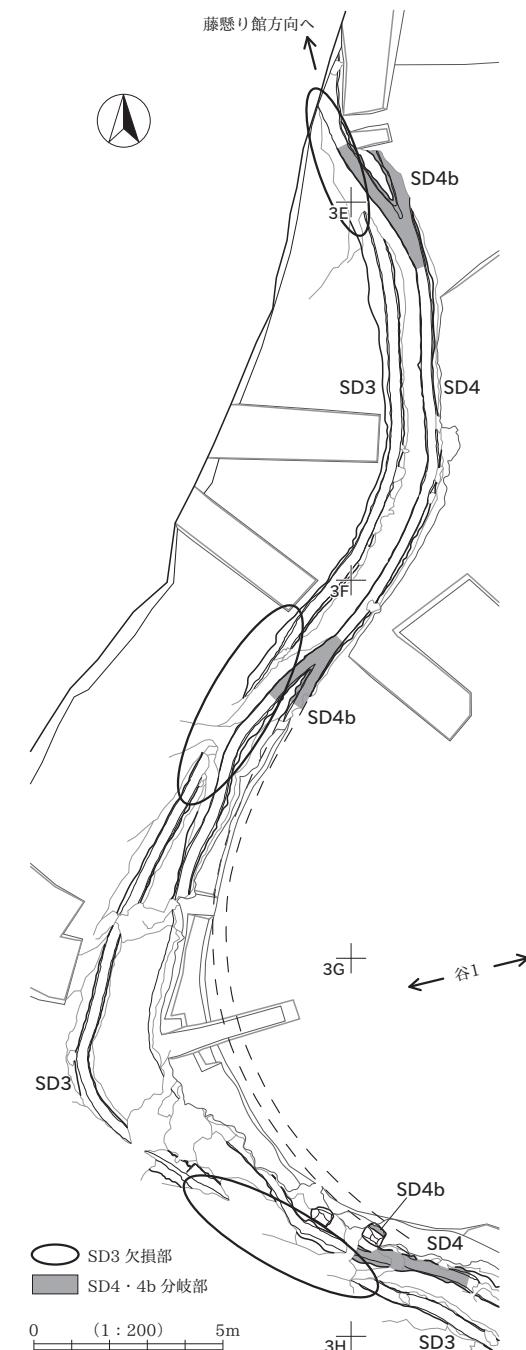
いずれも農業用水目的と考えられる溝で、調査区より南東約200mに位置する溜池(図版17・28)を水源として、尾根を挟んで北側の藤懸り館跡に存在した水田および谷内に存在していた水田(図版17)に水を供給していたと考えられる。

### SD3

岩盤を掘削した溝であり、調査区を南北に縦断する。下端幅は平均28cm、底面標高値は、グリッド5L3で22.781m、グリッド4E1で22.241mを測る。SD3の欠損部には、①岩盤崩落によるもの、②人為的に掘削したものとの2通りが認められる。SD4の3か所の分岐部直上に見られるSD3の欠損部(第9図楕円部分)は、SD4の新ルートがSD3を抉るように通るため、故意に掘削されたものであることが看取できる。谷1以南では北部に比べると、地盤の岩質が脆く、いたるところで崩落しているため遺存状態は悪い。これがSD4開削の要因と考えられる。南半部の底面には黄褐色シルトが貼られていたが、岩質が粗い部位の水漏れ防止処置と考えられる。また、崩落部位への貼付けも認められたことから、崩落個所を盛土成形し仕上げに黄褐色シルトを貼付けて補修し、利用し続けていたことが看取できる(図版22-3・5)。

### SD4

SD2の下層に存在する岩盤を掘削した溝。SD3が大部分で崩落し寸断されたため、その斜面下方に掘削されたと思われる。下端幅は平均29cm、底面標高値は、グリッド5K18で21.651m、グリッド3D20で21.453mを測る。谷1以北に比べると以南では岩盤が礫岩で脆いため崩落した箇所も多いがSD3よりは遺存状態は良く、溝掘削時の作業単位と思われる切り合い等が良好に看取できた(図版23-5・6)。



第9図 SD4・4b分岐部 (S=1/200)

一部底面に黄褐色シルトが貼られていたが、岩質が粗い部位の水漏れ防止処置、崩落個所のシルトによる補修、もしくは造成によるものと考えられる。谷1部と調査区北側の3か所でY字状に分岐する（第9図網掛け部分）。いずれも斜面裾側の溝が途絶えている（第9図破線部分）ため、谷1上部からの落石等何らかの要因で大きく崩落した後に、内側（SD3側）に再度大きく掘り直した（その際分岐部に当たる個所のSD3を破壊した）ことが看取できる。また、谷1部の再掘削部もその大部分で斜面裾側の立上り部を欠損しており、谷の上方からの落石等が多いことが窺える。

#### SD4b

グリッド5J・K付近でSD4の外側で岩盤を掘削した溝を確認した。谷1部におけるSD4の掘り直しと同様に、SD4の前身となる溝で、崩落を免れた部分であることが看取できる。

#### SD5

調査区東端、斜面裾際で確認した溝である。下端幅は平均20cm、底面標高値は、グリッド7M2で13.278m、グリッド5G14で11.059mを測る。掘削方法は上部に位置するSD3、SD4と同様に岩盤を掘削したものである。後述のSD6と同様に、著しく破損しており、谷1より北側では検出することが出来なかつた。調査着手前の時点でSD5・6から東に2mの位置に現在も流れる沢が存在していた。また、調査区東側の谷内部分は近年まで水田が営まれていた（図版17）ことからも、本遺構は大川城廃城以降に谷内で営まれていた水田へ用水を供給していたと考えられる。

#### SD6

SD5の一段下に掘削された溝。下端幅は約30cm、底面標高値は、グリッド7M2で13.040m、グリッド5H5で11.295mを測る。SD5の斜面裾側の立上りが欠落した箇所にSD6が掘削されている（図版5・6）が、SD6の埋没後にSD5が新たに開削されたとも考える事が可能なため、先後関係は不明である。全体的にSD5よりもさらに欠損が著しい。谷1以北ではSD5とともに検出されなかつた。これに関しては、①当初は存在していたものが失われた、②掘削当初から岩盤を掘り抜くのではなく着手前に流れていた沢がその前身で谷内底部の地面に掘削された、等が考えられるが判然としない。

## 2) 犬走り

#### SF7

SD4の東側斜面岩盤上の礫混褐色土層上面に3～4cmの厚さで黄褐色シルトを貼りつけて仕上げられた盛土層。標高値は、グリッド5L14で21.631m、グリッド5H5で21.523mを測る。SD4の保守管理のため通路として利用したものと考えられる。谷1以北では認められず、他の遺構と同様に度重なる崩落のため失われたと思われる。

## C 谷状地形（図版14・15・25）

本調査では、多くの崩落場所や谷状地形を確認した。その多くは堆積状況が不明瞭なものであったが、先述した遺構を破壊し、前後関係が明瞭なものについて述べる。

#### 谷1

調査区中央に存在するもので、藤懸り館の背後にある古館山を南北に2分する東西方向のものである。本調査区外ではあるがこの谷1上方南西に空堀が存在する。この谷1は調査の状態で、SD2西側斜面から水のしみ出している部分が存在し地下水の通り道となっていることが分かった。表土を除去したところ、

## 2 遺構各説

SD2 西側斜面は 10cm 下で岩盤が露呈し、底面に丸みを持つ緩やかな V 字状の断面を持つことが分かった。また、岩盤の上面が地下水の通り道になっていることも判明した。岩盤がすぐに露呈した部分より上方では厚く土砂が堆積しており、断面の形状は逆台形を呈している。また、底面の形状から幾多の崩落の跡が観察できた。SF1 から下の部分も厚く土砂が堆積し、断面形状は V 字状であった。底部には上部から流れてきた礫混じりの土砂が混じり、その上には砂質シルト層が複数回、堆積していたことが判明した。また、谷の底面部分は滑らかになっており、水流等により削られた結果と考えられる。

これらの地形変化の内、人為的な地形改変と判断できるものは SD3 の上部を垂直に切り崩した部分のみであると考えられ、人為的に谷地形を改変した可能性は低いと考えられる。また、遺物の出土がないため、時期については不明である。

当初の形状については不明瞭であるが、瀬波郡絵図に描かれた「ふる城」周辺の表現から、犬走り上部および下部の岩盤は露出していたと思われる。

### 谷 2

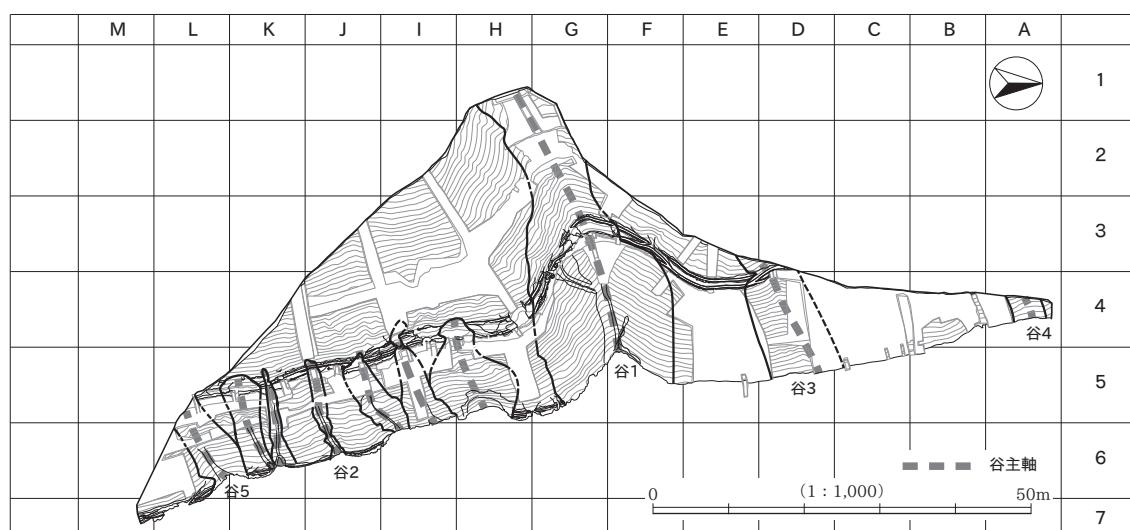
谷 5 と谷 1 の間に存在し、SD3、SD4 を破壊していることが確認できる。また、南から北方向へと谷が形成されていることも判明した。50 ~ 60cm の土の堆積の下に礫まじりの土砂が堆積していた。このことから、急激に埋まったことが分かる。断面は V 字から逆台形であり、山の裾部分では SD5 を破壊しているものと考えられる。

### 谷 3

谷 1 の北側に存在し、SD3・SD4 を破壊していることが明瞭に確認できる。岩盤上には 70 ~ 90cm の厚みで崩落土が堆積している。この堆積状況から 3 回の崩落および堆積がおきていることが分かった。北側での崩落が埋まったのち、再び、同位置で崩落がおき、さらに南側へ移動して崩落がおきたと判断できる。南側の堆積は黒色シルトでほかの堆積層が乾燥していることに比べて湿潤であった。そのため、現状ではこの部分が地下水の通り道になっていると判断できる。

### 谷 4

調査区の北端で確認したもので、厚さ 10cm 以下の腐葉土で覆われ、その直下に岩盤が存在する。その岩盤面は平滑である。現状でもシダが生えており湿気が多く、岩盤面には複数の地下水の通り道が確認



第 10 図 谷状地形分布図

できた。また、南側の傾斜面は土砂の堆積が50cm以上ある。この谷は断面が皿状をしており、急激な崩落によって谷になったものではなく、緩やかな水などの浸食によって形成されたと判断できる。この部分の築城当時の状況は不明であるが岩盤が露呈していた可能性が高い。

#### 谷5

調査区の南端に存在し、谷1に比べると小さな規模のものである。山の一部が雨水等により浸食を受けたりして、岩盤部分が崩落したことにより形成された。岩盤上には70～100cmの厚みで崩落土が堆積しており、底部には崩落した礫混じりの土砂が堆積している。断面形状は緩やかなV字状を呈する。

# 第V章 遺物

## 1 概要

今回の調査区は山城跡とはいえ、曲輪部ではなく崖面であることから、出土遺物は非常に少ない。磁器4点、砥石1点、不明金属製品1点が出土したが、遺構内出土であってもいずれもI層である腐葉土層内からのもので、同時に近現代の空缶やビニールなどのゴミも出土しており尾根上方から混入したものと思われる。そのため遺構の年代を特定できるものではない。しかし、遺物の年代は15世紀後半頃に遡ることのできるものもあり、今後大川城の築造年代を検討する際の資料として価値を有するであろう。

## 2 遺物各説

### 磁器（図版15・28）

1は青花の椀である。体部が外方へ直線状に緩く立ちあがり、口縁端部の内外面に圈線をめぐらせる。体部外面は一筆書きの丸を主体とする連続文で埋め尽くされる。小野正敏氏分類の染付椀C群Ⅲに相当する〔小野1982〕。15世紀後半。

2は染付椀の体部片である。小振りながら器肉は厚く、外面に圈線がめぐる。

3は小型の染付椀で口縁端部の内面に圈線をめぐらせ、見込み部に雲鶴文を描く。2、3ともに肥前系磁器で、18世紀頃のものと思われる。

4は方形に近い八角形の染付小皿で、内面に雷文をめぐらせ見込み部に梅花を描く。いずれも型打成型による陽刻文である。底部に方形の高台を持つ。19世紀後半のものと思われる。

### 石製品（図版15・28）

5は砥石である。凝灰岩製の薄い板状のもので、前・後面は凹状に内湾し、左側面は半弧状に丸みをもつ。右側面は平坦面を横断する幅4mm～6.5mmの4条の浅い溝状砥面を有する。下面には2条の細い溝が認められ、切断面と思われる。上面は欠損しており不明だが、少なくとも4面の砥面で使い分けがおこなわれていたことが看取できる。年代は不明である。

## 第VI章 まとめ

### (1) 遺構

先述のように今回の調査では調査区の制限もあり、中世山城としての大川城に付随する防御遺構を確認することはできず、廃城以降の農業遺産と考えられる溝を確認することができた。これらの溝は、調査区の南東約180mに位置する池（標高約35m前後）（図版17・28）の手前にまで伸びることが現況からも認められた。この池と途中の古館山・高館山の間の谷筋に流れる沢を水源とし、SD3・4は緩やかに下りながら藤懸り館跡に営まれた水田まで続き、SD5・6は谷内の水田に用水を供給しながら大川へと流れ込んでいたと思われる。これらの溝は、いずれも岩盤を掘削したものである。

以下に調査で得た知見をもとに、これら溝の掘削方法について述べる。

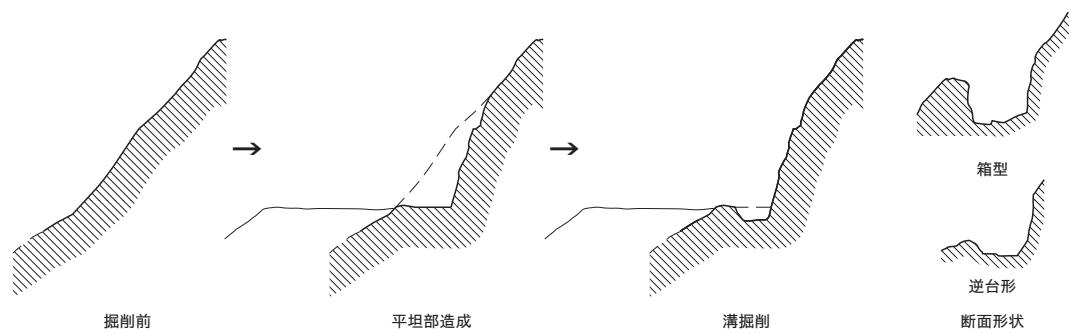
まず、掘削作業は2工程に分けられる（第11図）。

1. 平坦面・作業通路の作成。2. 溝の掘削。

まず1については、作業通路として溝掘削予定面の高さに犬走りを盛土形成する。特に版築などの工法を用いた痕跡は認められず、簡易に盛土成形したものである。ただし、調査で確認することが出来たのはSD4に付随するものとしてのSF7である。SD3はSD4より約80cm上方に掘削されており、その脇に犬走りを確認していない。SD4の掘削時に安定した岩盤層を掘り抜くために剥がされたと推察する。

幅40～50cmの平坦面を確保するため、岩盤斜面の高さ約0.9～1.2mの位置から断面三角形状部分を掘削する。盛土内に多くの礫が含まれていたことから平坦面の削り出し時に盛土成形したと考えられ、平坦面、犬走り造成は一連のものであったと思われる。

2段階目で幅約30cm、深さ10～20cmの溝を掘削する。その際、平坦面底部から掘削する場合、断面形は箱状を呈するが、1段階目が急角度の箇所では2段階目が緩く掘削しているため、断面形は逆台形を呈する箇所が多い。これについては、工人の違いによるもの、岩盤の岩質の差によって生じたもの等を想定できよう。SD4では約1～1.8mの作業単位を確認することが出来た。地形に合わせて湾曲する際は、短いスパンの直線の軸方向を変化させながら掘削する。また、南部では溝底部には切り合いによつて生じた段差が認められた（図版22-5・6）。切り合いはその大半で北側部分が勝ち、低くなることから、上流から下流への勾配を意識したものである。溝の掘削後、平坦面（SF7）と谷1部より南側では溝の底面に黄褐色シルトを貼り付け仕上げる。これは先述のように、谷1以後のように岩盤が脆い箇所の溝内部に貼付した漏水対策と考える。また、大きく崩落した箇所には盛土をして充填したうえで黄褐色シルト



第11図 溝の掘削工程

を貼り付けて補修した様子が観察された（図版 21-3・4）。

なお、SD5・6 では谷 1 の南側であっても黄褐色シルトの貼り付けは認められなかった。

SD5・6 の斜面下方にはグライ化した粘土層が厚く堆積しており、岩石類の堆積は認められなかった。このグライ粘土は谷内に近年まで営まれていた水田由来のものと思われる。SD3・4 と SD5・6 は水の供給先が異なる。そのため、それぞれ同時期に併存していたと考えられる。すると、作業過程において碎いた岩石類をそのまま全て下方に落としていたとは考え難く、行先は不明であるが搬出したものと考えたい。

調査区の南北で岩質が大きく異なる。谷 1 を境に堅緻な凝灰岩を覆うように風化の著しい礫混じりの岩質の層が堆積している（図版 26-2～4）。南に進むにつれその傾向は顕著になり、SD3・SD4 の遺存状況も悪くなる。

IV章でも述べたように、今回の調査で検出した遺構はいずれも調査区外に続くものである。しかし、本章で述べたように検出部からだけでも犬走り上の SD3<SD4<SD2 という新旧関係が看取できた。また、調査区から溜池までの SD2・3・4 該当部の現況を見てもいたるところで SD3 部が崩落している状況は調査区内と同じ様相であり、調査区内での崩落が無くとも SD4 の掘削は必然的なものであったと推察できる。

検出遺構の具体的な掘削時期は出土遺物が無いため不明であるが、現地調査中に横山氏から、溝は農業用水路として近世以降活用されたものであったとしても、その溝、犬走りは中世時期に使用されたものを改変したものである可能性も否めないとご教示を受けた。

1948 年撮影の空中写真には、藤懸り館の跡地、調査区前面の谷内底部ともに水田を確認することが出来た。地元住民の話では、一昔前まで藤懸り館の跡地に存在していた水田は、奥の溜池から犬走りにあつた溝を使って水をひいていたという。調査着手前の時点で SD2 は完全に埋没していなかった（図版 20-4）ことから、当時も用水路として機能していた可能性が高い。

## （2）絵図中の大川城と岩盤検出状況

慶長 3（1598）年に上杉家が会津移封される前年の慶長 2 年までに描かれた『越後国郡絵図』には、柵を巡らせた中に複数の建物から構成される藤懸り館が描かれている（第 12 図）。同じ山城でも建物も描かれている村上城とは異なり、「ふる城」と表示される大川城には建物が一棟も描かれていない。当時すでに使用されず、日常の政務を執る藤懸り館が維持されていたと思われる。また、この絵図には山地の多くが滑らかな曲線と木々の表現で描かれているが、大川城はそれとは明らかに異なる硬質なタッチで急峻な岩壁が露出した様子の岩山として描かれている。これはまさに今回の調査で顕わとなった姿に他ならない。現在でこそ近代の植林によって木々に覆われた姿の大川城跡一帯ではあるが、往時には岩壁が圧倒的な存在感を示す質実剛健な中世山城の姿であつただろう点は想像に難くない。今後、曲輪等、山城の主要部の調査が進むことで築城時期を含め大川城跡の様相が明らかとなることを期待したい。



第 12 図 ふる城・藤懸り館（上）村上ようがい（村上城）（下）（越後国郡絵図〔東京大学史料編纂所 1985〕より一部抜粋・米沢市（上杉博物館）所蔵）

## 引用・参考文献

- 温海町史編さん委員会 1978 『温海町史 上巻』 温海町教育委員会
- 上原甲子郎 1961 「巻貝形土製品」『考古学雑誌』47巻3号
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 加藤 学ほか 2021 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第290集 県内遺跡発調査報告書IX 令和元・2年度県内遺跡試掘・確認調査』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1991 「絵図にみる城館と町」『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 山北村教育委員会 1965 『山北村郷土史－山と川と谷の民衆の歴史』 山北村教育委員会
- 山北町史編さん委員会 1987 『山北町史 通史編』 山北町
- 東京大学史料編纂所 1985 『越後国郡絵図二 濱波郡』 東京大学 原図 米沢市（上杉博物館）所蔵
- 新潟県 1983 『新潟県史 資料編1 原始・古代一 考古編』 新潟県
- 新潟県 1986 『新潟県史 通史編1 原始・古代』 新潟県
- 新潟県教育委員会 1969 『山北町上山遺跡調査概要』 新潟県教育委員会
- 新潟県教育委員会 1987 「第4章 調査実施城館跡等個別記述」『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
- 早川 圭 2017 「戦国城郭の多様性 境目の城」『季刊考古学 特集 戦国城郭の考古学』 第139号 （株）雄山閣
- 本田祐二 2019 「第6章 中世 第10項 石製品」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 新潟県農地部農村総合整備課 1992 『土地分類基本調査 温海・勝木』 新潟県農地部農村総合整備課
- 横山勝栄・田中慎吾 2007 「『北越後大川城』（新潟県岩船郡山北町大字府屋）いわゆる『越後国郡絵図』なかの城郭」『新潟県考古学談話会会報』第32号 新潟県考古学談話会

## 観察表

遺構観察表

種別	番号	グリッド	平均幅 (m)	深さ (m)	断面形	覆土	新旧関係	出土遺物	備考
SF	1	3D・G、4D・G・H・L 5I・J・K・L	0.63	—	台形	盛土状			平坦部
SD	2	3D・F・G、4D・E・F・G・H・L 5I・J・K・L	0.81	0.19	皿状	单層	SD2>SD4>SD3	磁器 / 砥石 / 鉄製品	
SD	3	3E・F・G、4E・G・H・I 5J・K・L	0.34	0.2	逆台形～箱型	单層	SD2>SD4>SD3		岩盤を掘削した溝
SD	4	3D・F・G、4D・E・F・G・H・I 5I・J・K・L	0.35	0.15	逆台形～箱型	单層	SD2>SD4>SD3		岩盤を掘削した溝
SD	5	5G・H、6I・J・K・L 7L・M	0.39	0.22	逆台形～箱型	单層	SD6>SD5		岩盤を掘削した溝
SD	6	5G・H、6I・J・K・L 7L・M	0.45	0.09	逆台形～箱型	单層	SD6>SD5		岩盤を掘削した溝
SF	7	4H・I、5I・J・K・L	0.89	—	台形	盛土状			平坦部

遺物観察表

報告番号	遺構	層位	グリッド	種別	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	口縁部 残存率 /36	色調 (外面)	色調 (外面)	調整・文様等	時期	備考
1	—	表土	4C3	磁器 (染付)	椀	(142)	(31)	—	2/36	明青灰	明青灰	丸を主体とした連続文 内・外面二重圏線	15世紀後半	染付碗 C 群 III
2	—	表土	—	磁器 (染付)	椀	—	—	(27)	—	灰白	灰白	外面圏線	18世紀以降	
3	—	表土	4H3	磁器 (染付)	椀	(64)	31	27	12/36	灰白	灰白	内面口縁部圏線 見込み雲鶴	18世紀以降	
4	SD2	1層	4G23・ 4H3	磁器 (染付)	皿	74	24	38	13/36	灰白	灰白	内面雷文 見込み梅花 5弁の内3弁に異須付着	19世紀以降	
5	SD2	1層	5K18	石製品	砥石	長辺 108	短辺 69	厚さ 13	—	灰	灰	表裏面凹状に内湾 側面外湾 小口面 2条の溝状砥面	不明	凝灰岩製

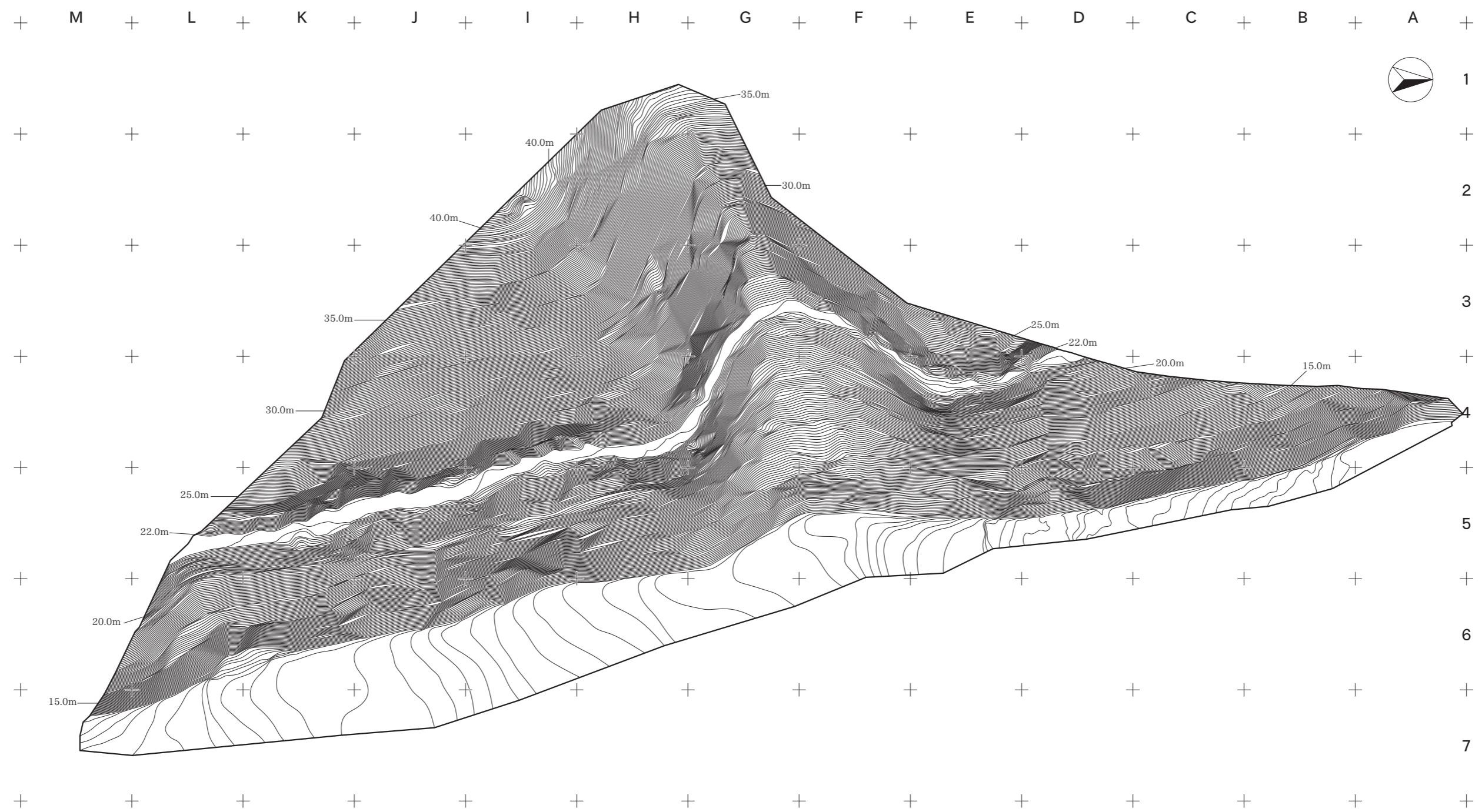
# 図 版

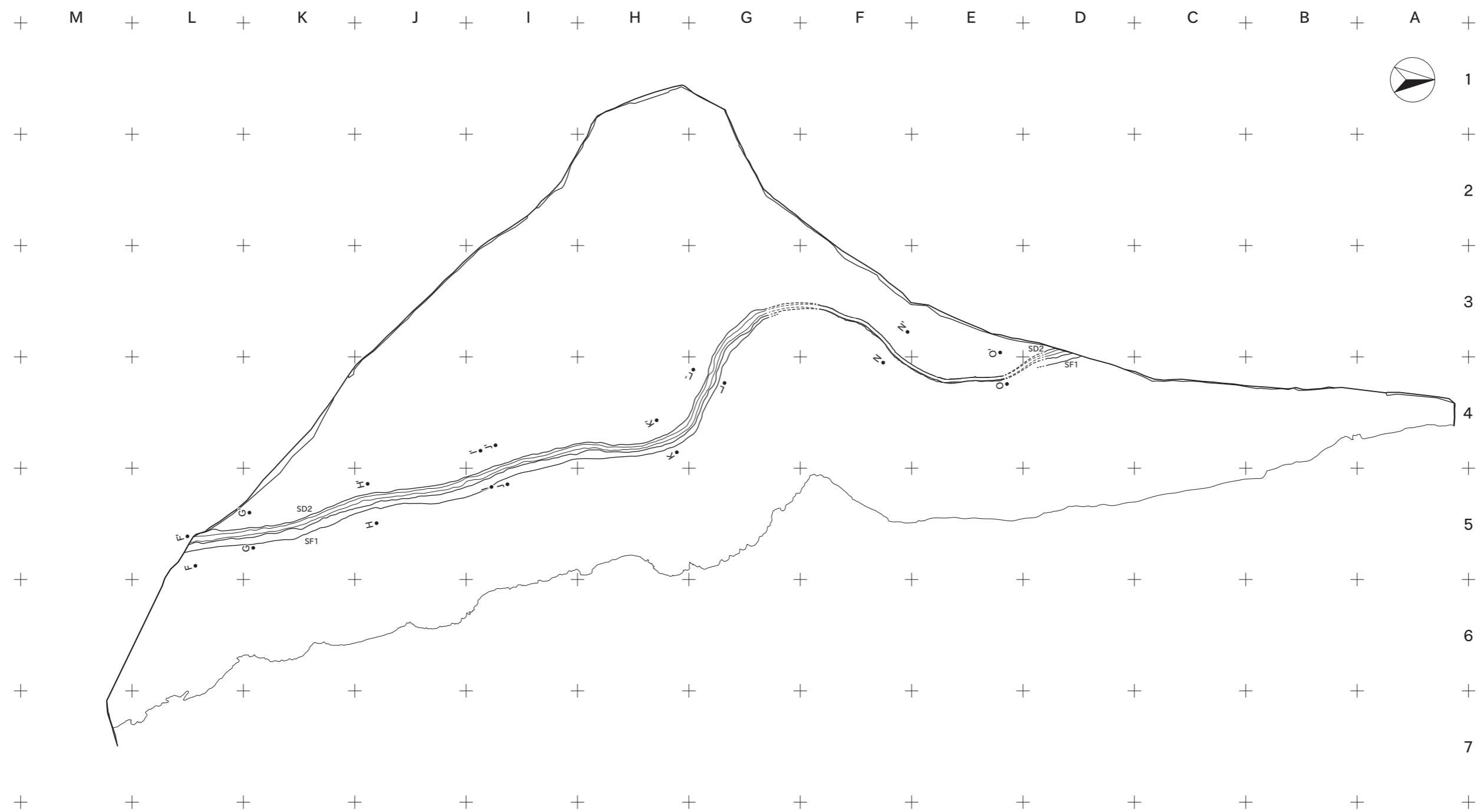
大川城跡周辺図

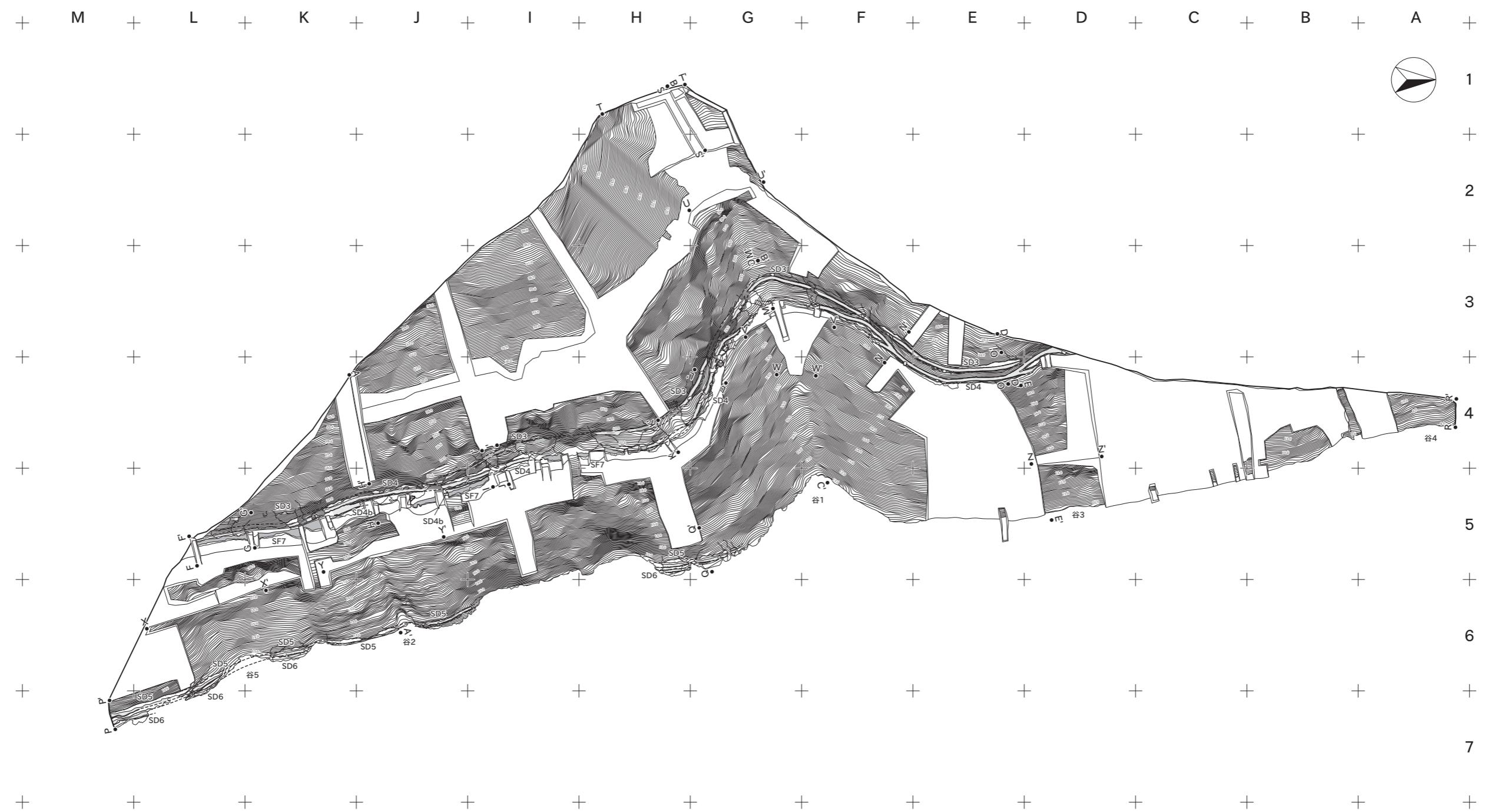
図版1

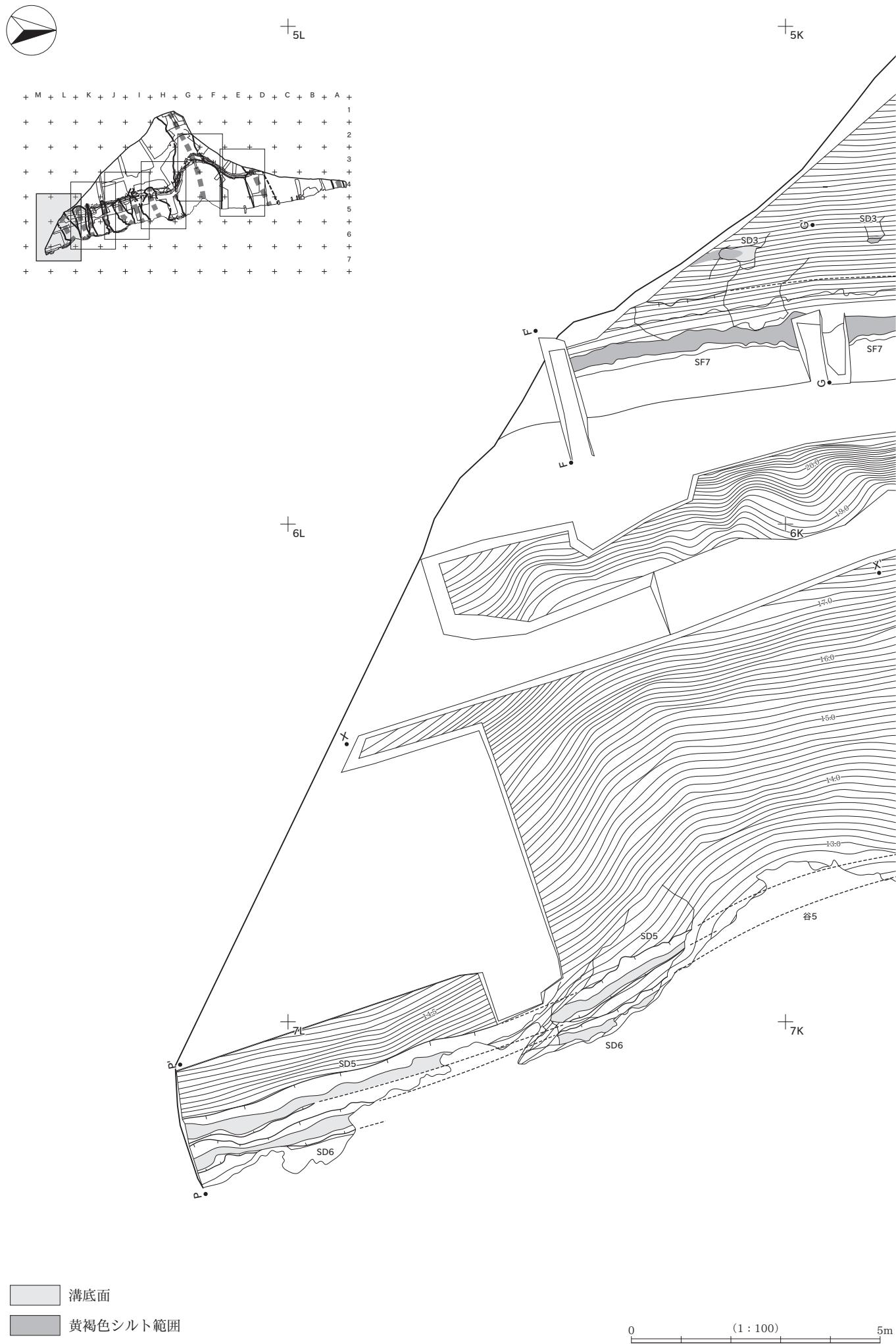


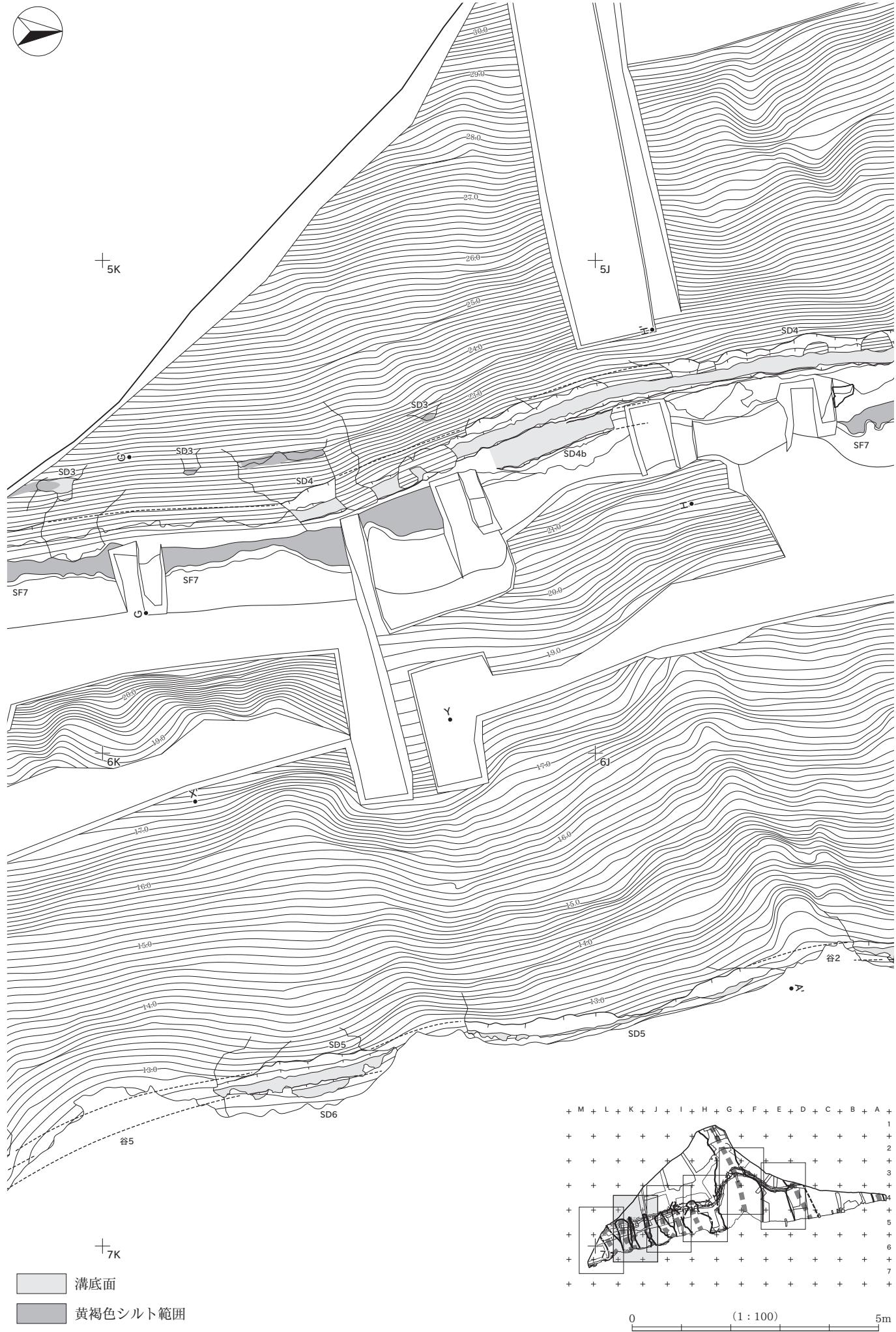
(横山・田中2007「大川城館全体図」と国土地理院基盤地図情報を合成・改変)





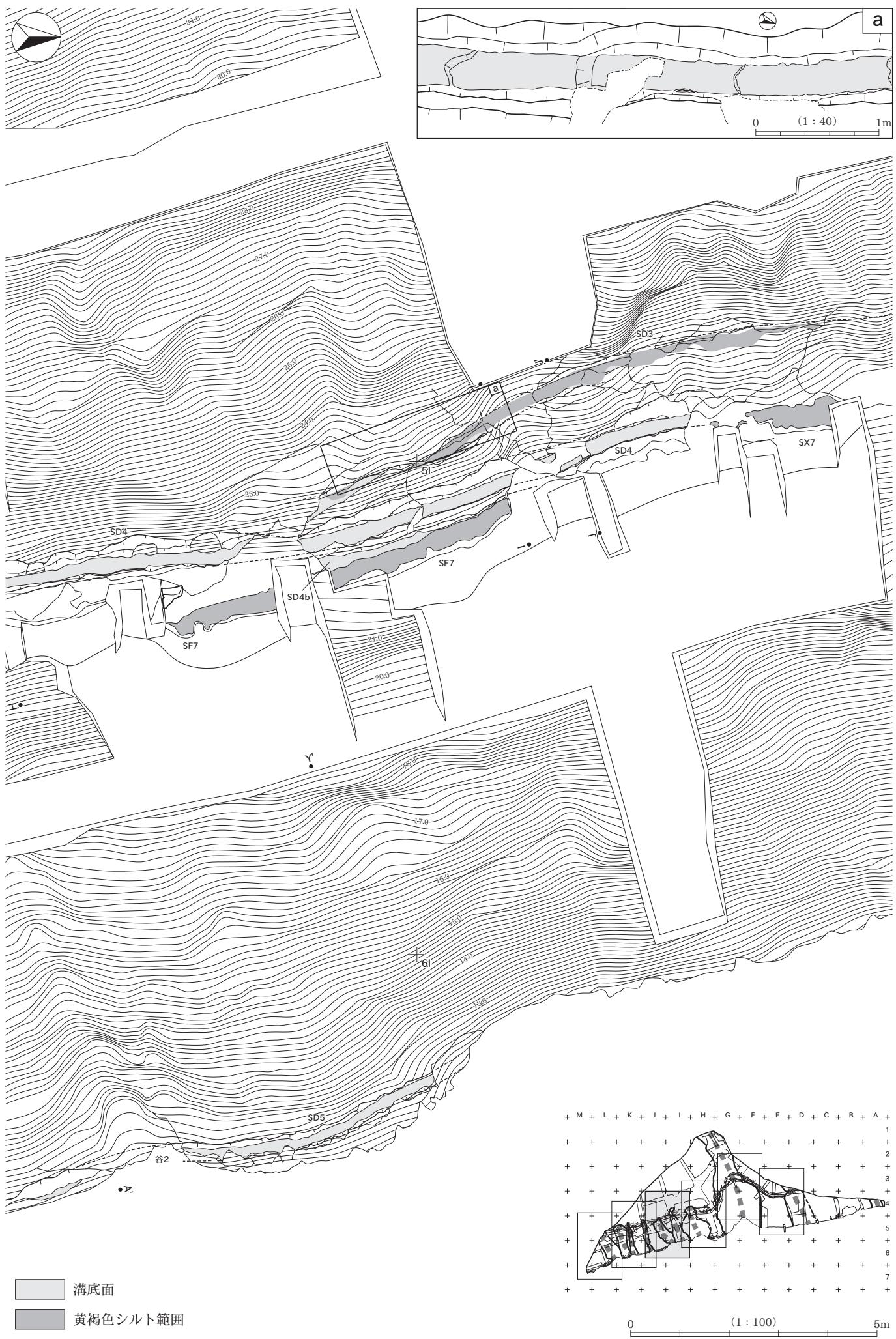






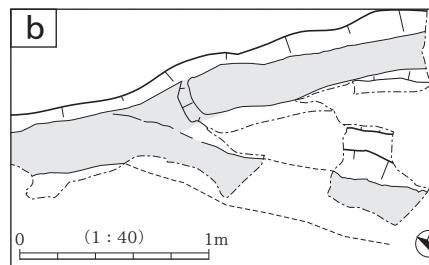
下層遺構分割図(3)

図版 7



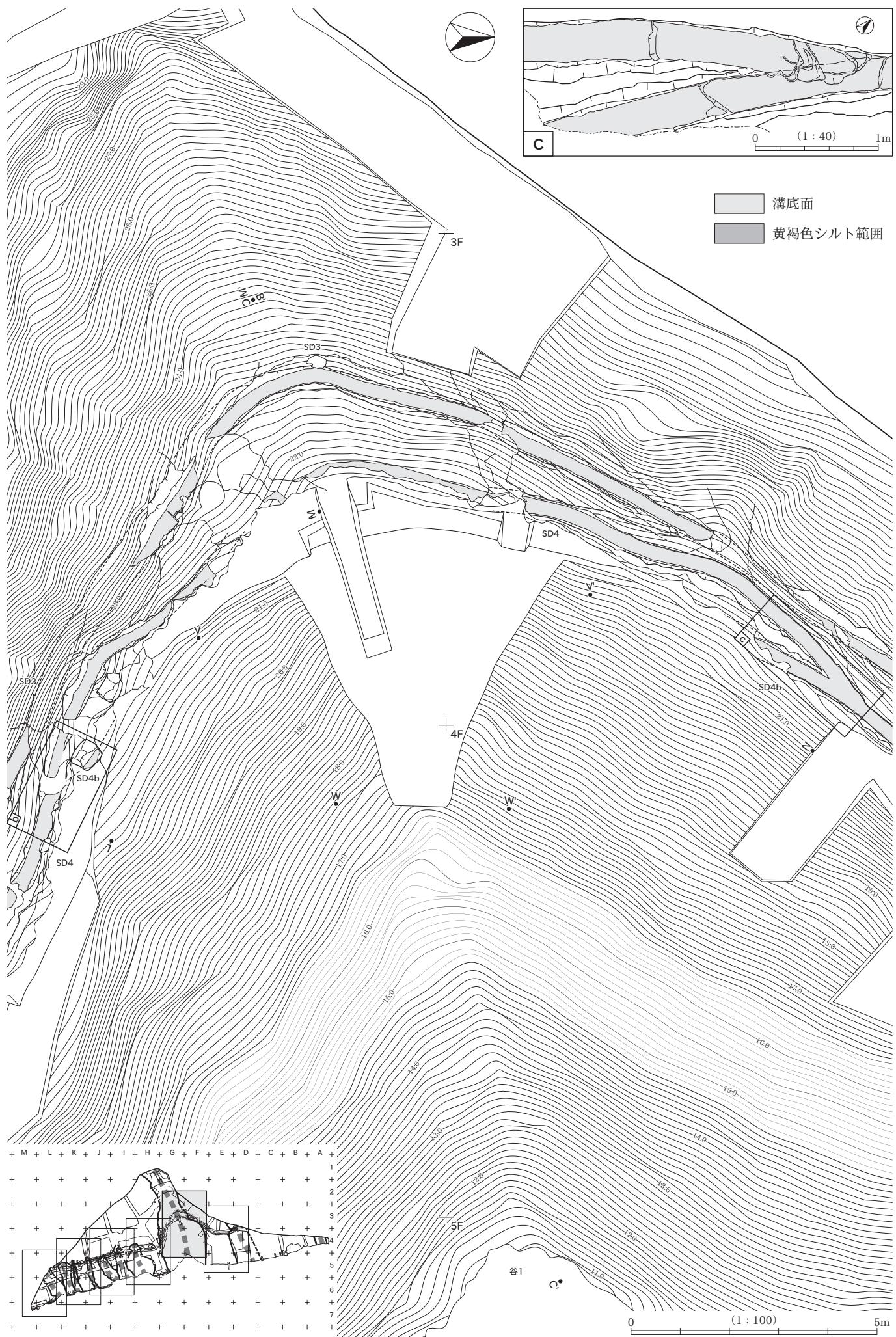
図版 8

下層構造分割図 (4)

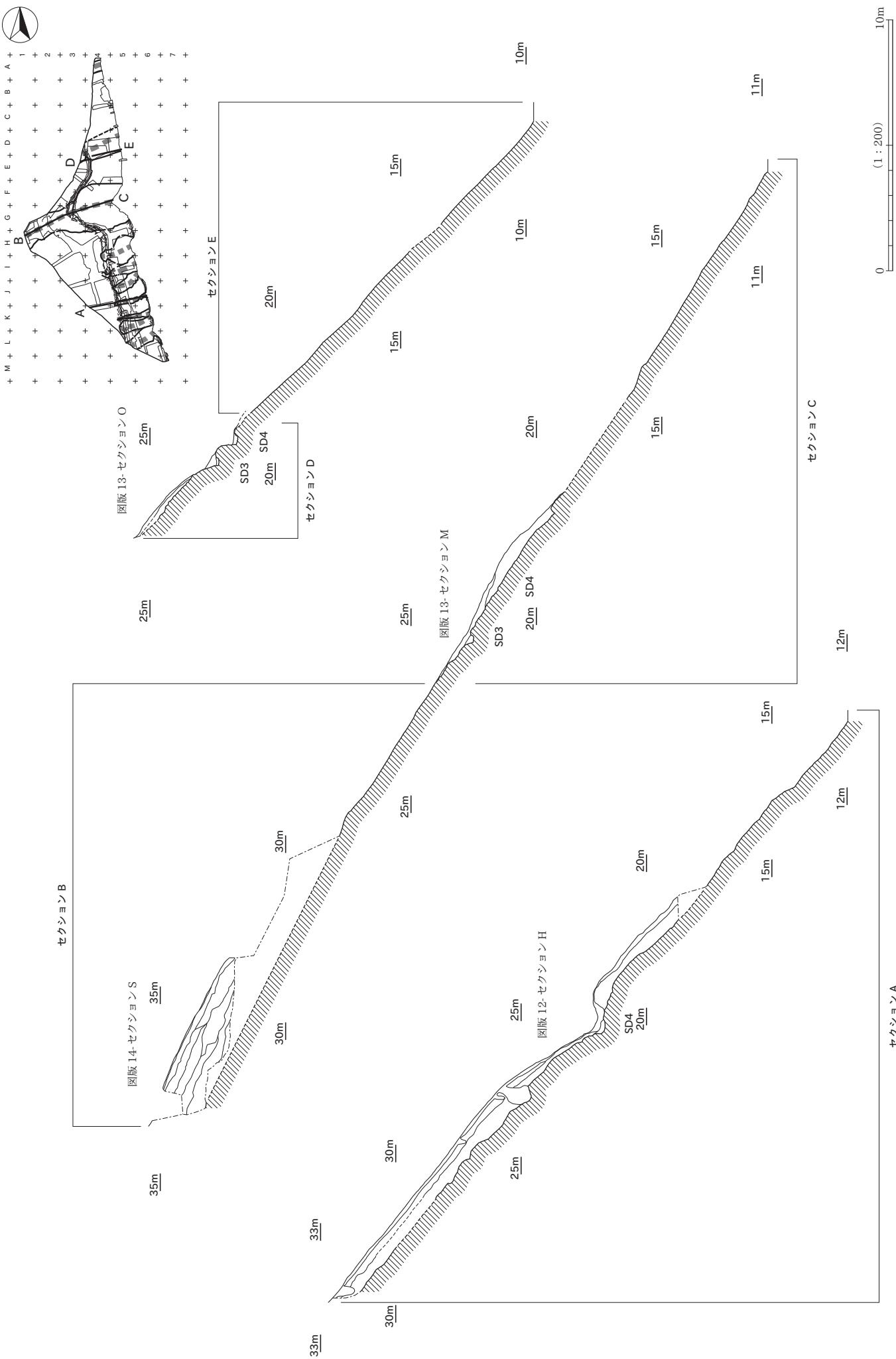


下層遺構分割図(5)

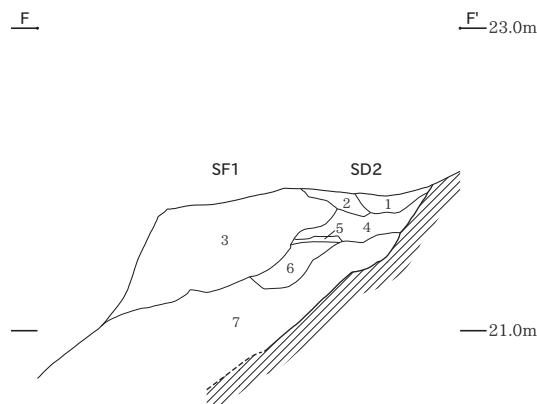
図版9



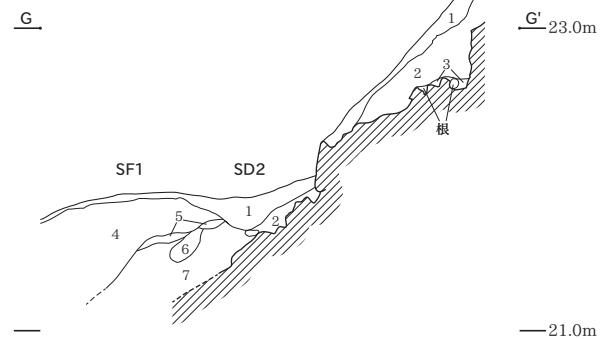




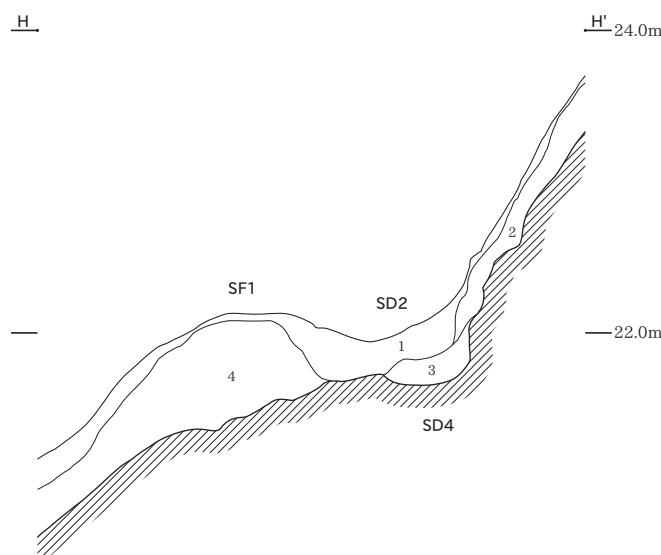
セクションF



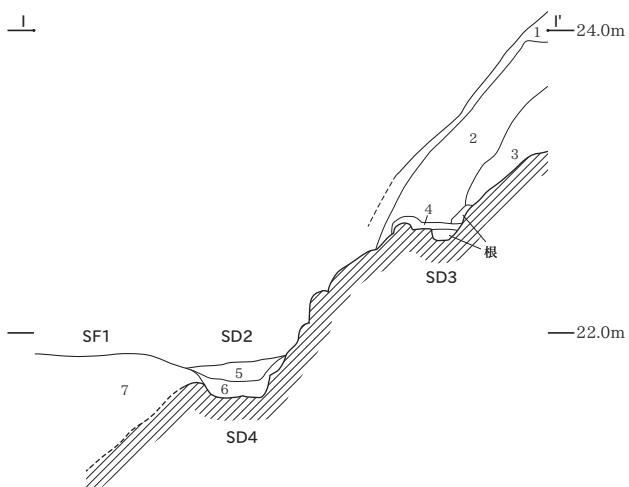
セクションG



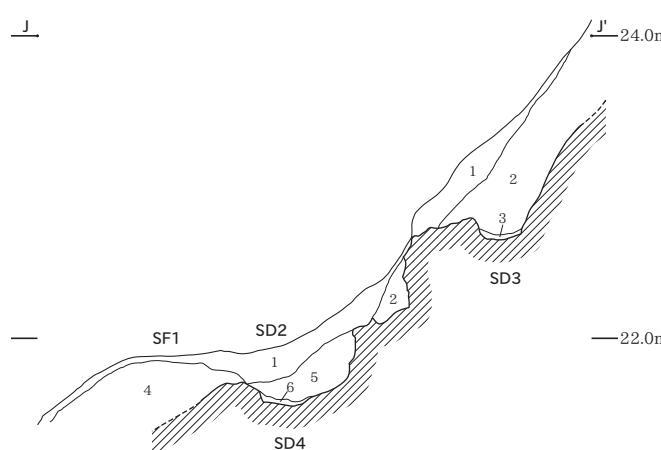
セクションH



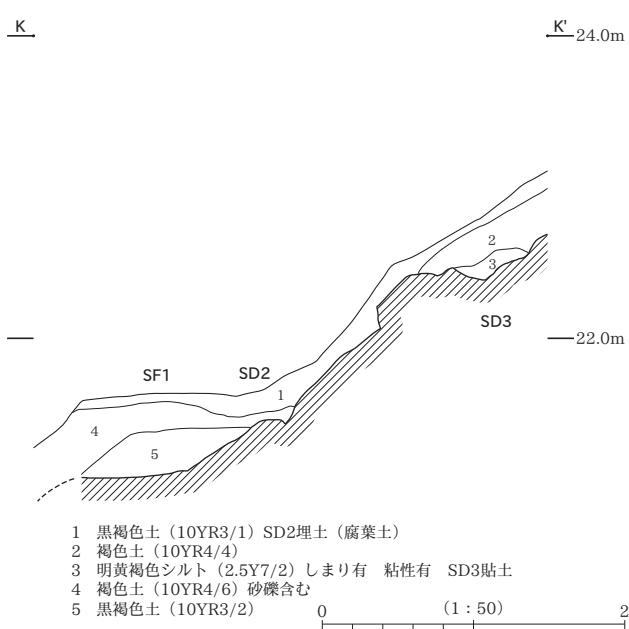
セクションI



セクションJ



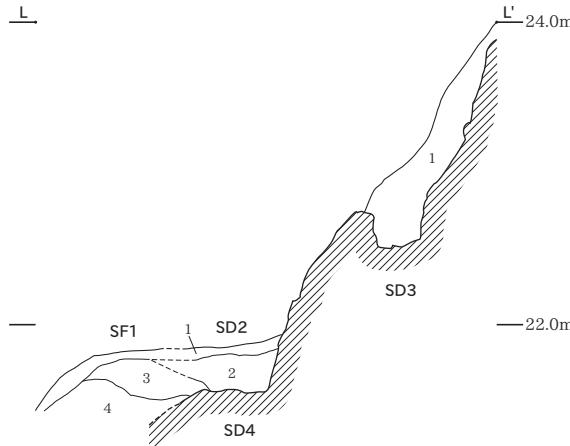
セクションK



遺構断面図(2)

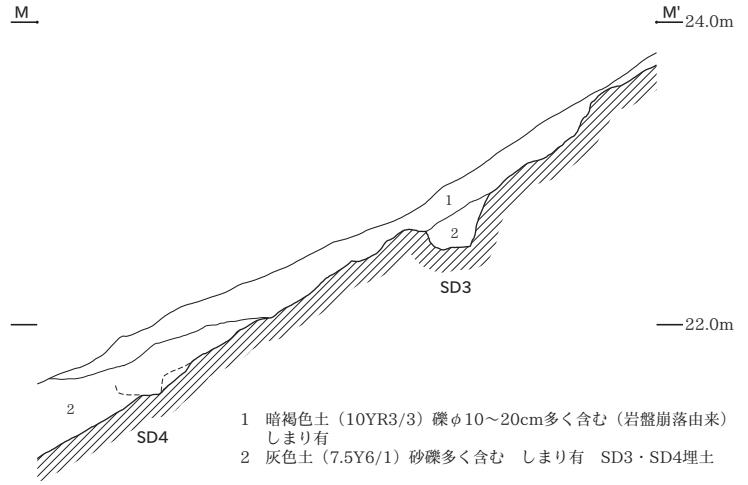
図版 13

セクションL

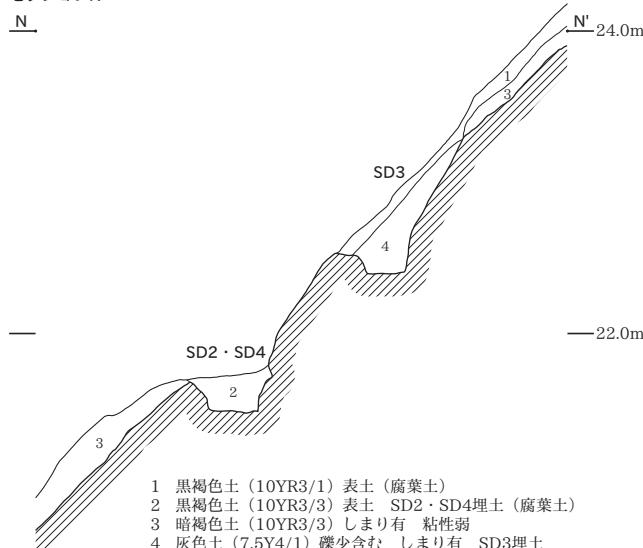


- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 SD3埋土 (腐葉土)  
2 黒褐色土 (10YR3/2) SD2・SD4埋土  
3 灰黄褐色土 (10YR6/2) 磯多く含む SF1盛土  
4 明黄褐色土 (10YR7/6) SF1盛土

セクションM

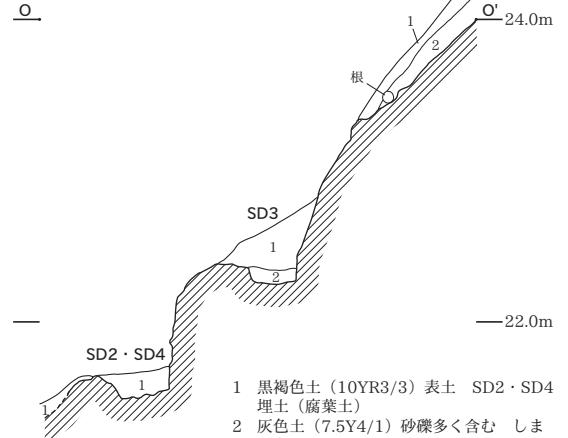


セクションN



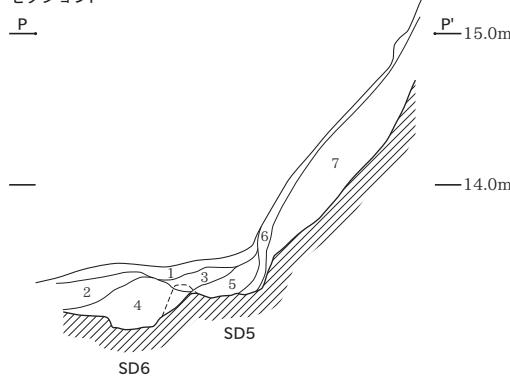
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)  
2 黒褐色土 (10YR3/3) 表土 SD2・SD4埋土 (腐葉土)  
3 暗褐色土 (10YR3/3) しまり有 粘性弱  
4 灰色土 (7.5Y4/1) 磯少含む しまり有 SD3埋土

セクションO



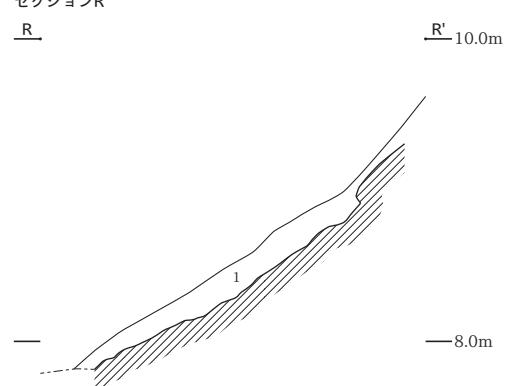
- 1 黒褐色土 (10YR3/3) 表土 SD2・SD4埋土 (腐葉土)  
2 灰色土 (7.5Y4/1) 砂礫多く含む しまり有 SD3埋土

セクションP



- 1 褐灰色砂質土 (10YR6/1)  
2 にぶい黄褐色砂礫土 (10YR5/3)  
3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)  
4 灰黄褐色砂礫土 (10YR6/2) SD6埋土  
5 褐灰色砂質土 (10YR5/1) SD5埋土  
6 黒褐色土 (10YR3/1) SD5埋土  
7 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) SD5埋土

セクションR



- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)

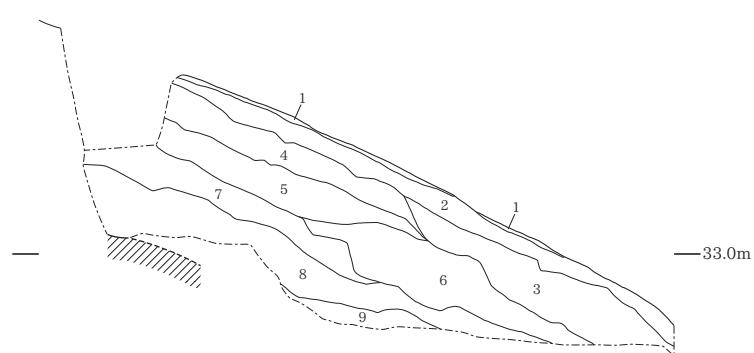
図版 14

遺構断面図 (3)

セクション S

S

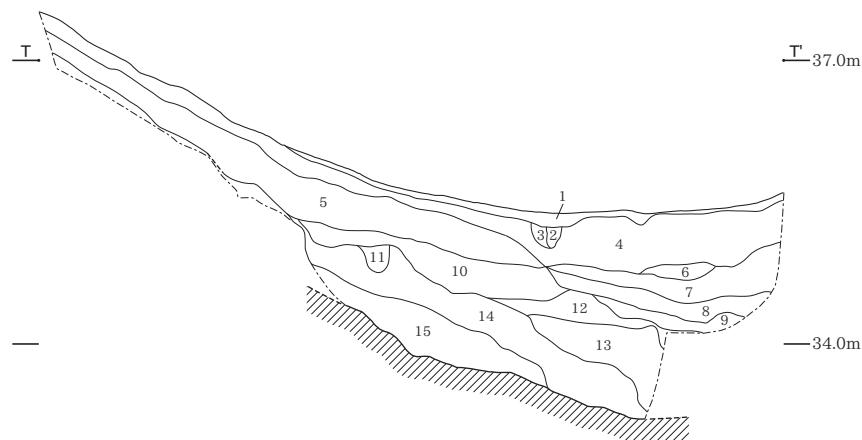
S' 36.0m



セクション T

T

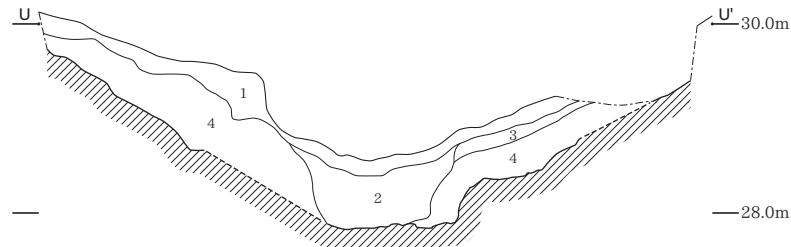
T' 37.0m



セクション U

U

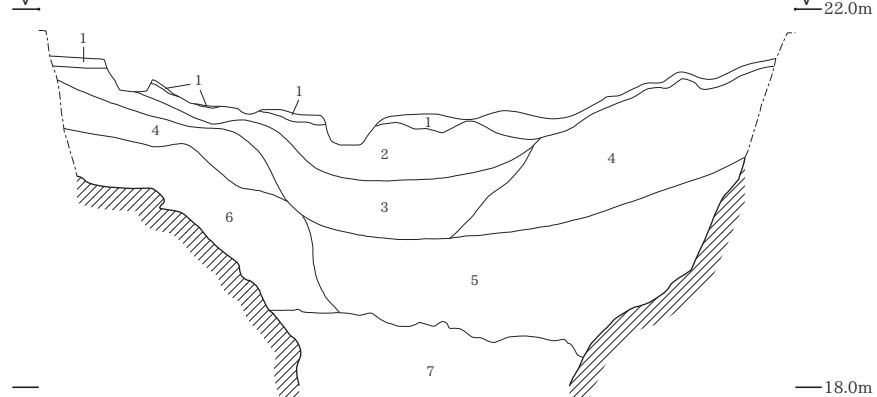
U' 30.0m



セクション V

V

V' 22.0m

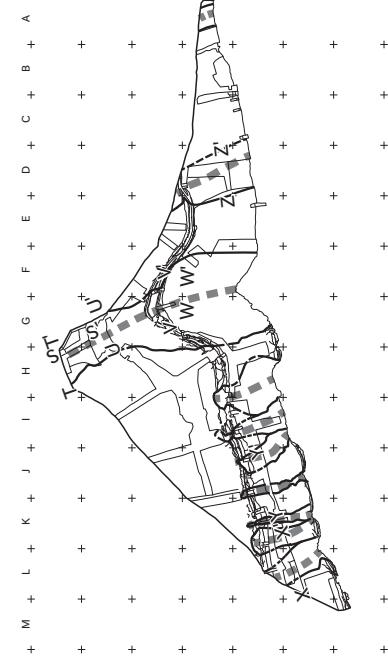


セクション W

W

W' 17.0m

セクション W  
1 褐灰色砂礫 (10YR6/1)  $\phi$  5~20cm 磨多く含む



セクション S

1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)

2 黒褐色土 (10YR3/2)

3 灰黄褐色土 (10YR7/4)

4 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)

5 褐灰色土 (10YR4/1)  $\phi$  2~4cm 小礫多く含む6 にぶい黄橙色土 (10YR7/3)  $\phi$  5cm 磨合む7 褐色土 (10YR4/4)  $\phi$  5~10cm 磨合む8 灰黄褐色土 (10YR5/2)  $\phi$  10cm 磨多く含む

9 褐色土 (10YR3/4)

セクション T

1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)

2 にぶい黄橙色土 (10YR6/3)

3 灰黄褐色土 (10YR6/2)

4 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)

5 黒褐色土 (10YR3/2)

6 灰黄褐色土 (10YR5/2)  $\phi$  2~5cm 磨多く含む7 褐灰色土 (10YR4/1)  $\phi$  2~4cm 小礫多く含む

8 暗褐色土 (10YR3/3)

9 褐灰色土 (10YR5/1)  $\phi$  2~5cm 磨含む

10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)

11 灰黄褐色土 (10YR5/2)

12 褐色土 (10YR4/4)  $\phi$  5~10cm 磨多く含む13 灰黄褐色土 (10YR5/2)  $\phi$  10cm 磨多く含む14 褐灰色土 (10YR5/1)  $\phi$  3~5cm 磨多く含む

15 褐灰色砂礫 (10YR4/1)

セクション U

1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)

2 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2)

3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2)

4 にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/3)

セクション V

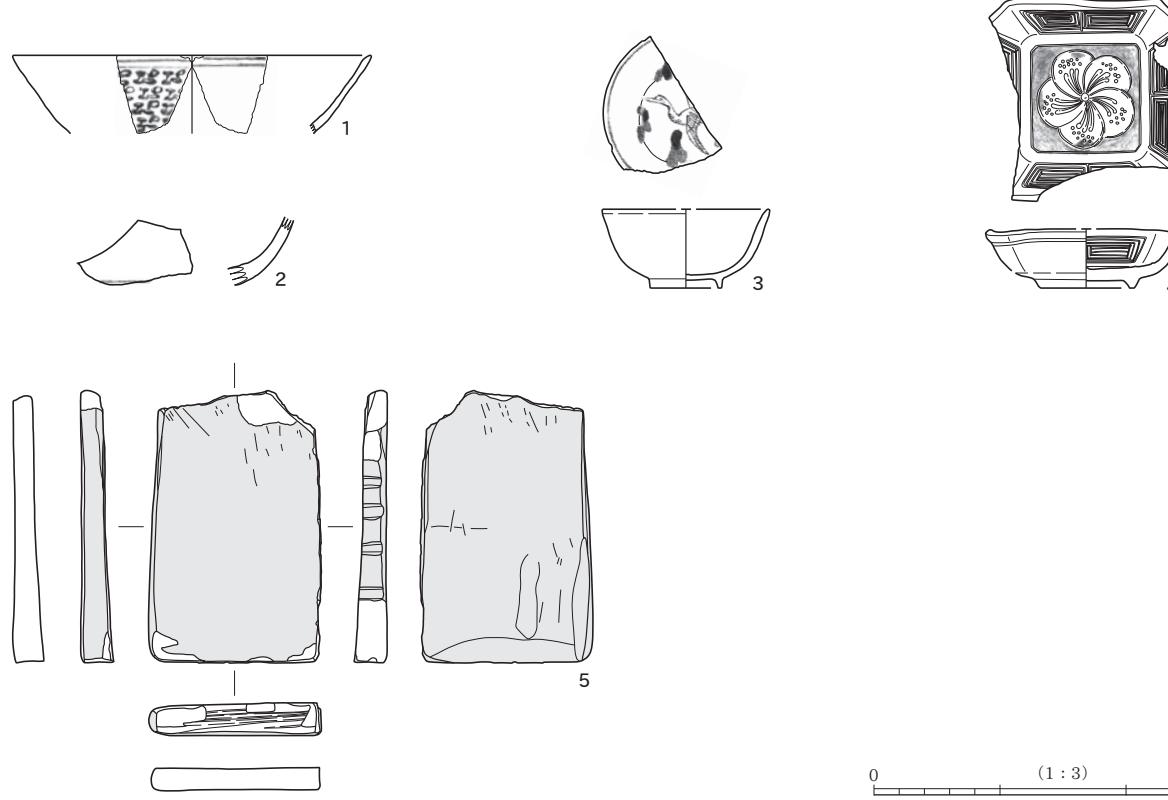
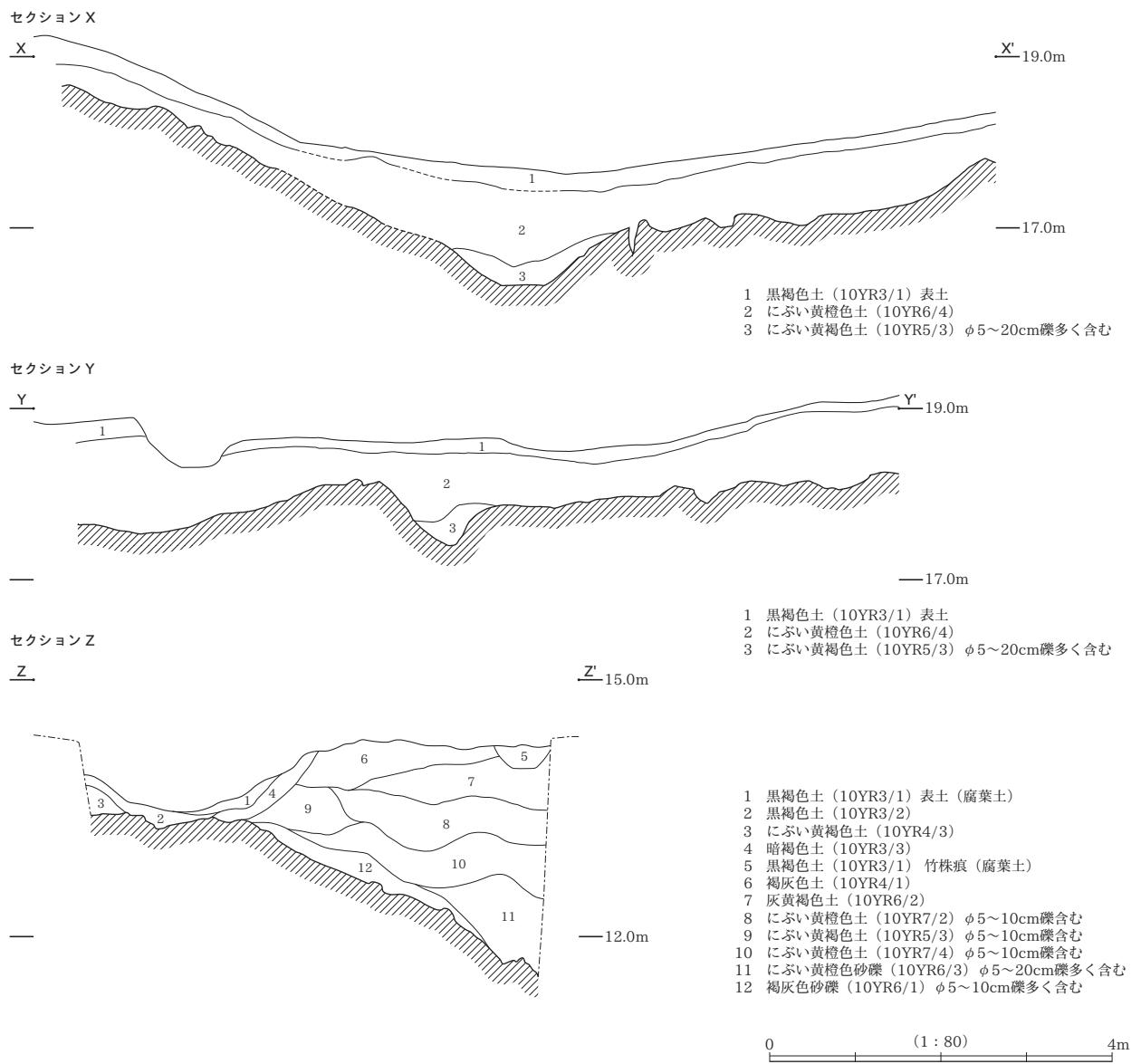
1 黒褐色土 (10YR3/1) 表土 (腐葉土)

2 灰色土 (7.5Y6/1) 砂礫多く含む

3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)

4 褐色土 (10YR4/4)  $\phi$  5~10cm 磨多く含む5 灰黄褐色土 (10YR5/2)  $\phi$  2~5cm 磨多く含む6 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)  $\phi$  2~5cm 磨多く含む7 褐灰色砂礫 (10YR6/1)  $\phi$  5~20cm 磨多く含む

0 (1 : 80) 4m





慶長 2 年 大川城周辺

(越後国郡絵図 [東京大学史料編纂所 1985] より一部抜粋加筆・米沢市(上杉博物館)所蔵)



大川城の位置 (1948年3月31日 米軍撮影) (国土地理院空中写真 USA-R-1225-47 を一部抜粋加筆)



調査区遠景（北東から）



大川城跡遠景（北から）



調査区 完掘全景（北東から）



調査区 完掘全景（上空から 写真上が西）



調査区着手前（北東から）



調査区着手前（南東から）



犬走り部南 (SF1 · SD2) 側着手前 (南から)



犬走り部 (SF1 · SD2) 北側着手前 (南から)



基本層序 セクション A 上段 (北東から)



基本層序 セクション A 中段 (北東から)



基本層序 セクション A 下段 (北東から)



基本層序 セクション R (南から)



セクション H (SD2・SD4) (北東から)



セクション H (SD1・SD4) アップ (北から)



セクション G (SF1・SD2) (北から)



SF1・SD2 完掘 (北から)



SF1・SD2 完掘 (南から)



SD2 砂石出土状況 (北から)



セクション N (SD3) (南東から)



セクション O (SD3・SD4) (南から)



セクションI (SD3・SD4) (南東から)



セクションI (SD3) (南から)



SD3 崩落部 黄褐色シルト貼付補修部 検出状況 (北東から)



SD3 崩落部 完掘 (北東から)



SD3 黄褐色シルト検出状況 (南東から)



セクションJ (SD2・SD4) (北東から)



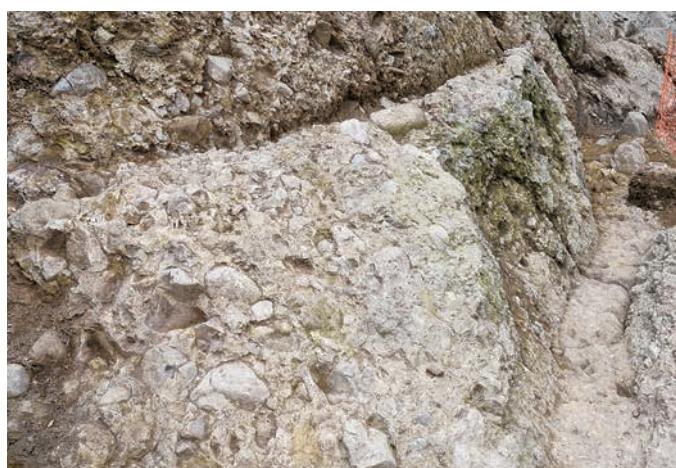
SD3・SD4 谷1部 完掘 (北から)



SD3・SD4 谷 1 部以北 完掘 (北から)



SD3・SD4 谷 1 部北側 完掘 (南西から)



SD3・SD4 谷 1 部南側 完掘 (南東から)



SD3・SD4 谷 1 部以南 完掘 (北から)



SD4 作業単位 (東から)



SD4 作業単位 (南東から)



SD4b 検出状況 (北から)



SD4b 検出状況 (南から)



SD3・SD4・SD4b 谷1部 完掘(上空から 写真上で西)



SD4・SD4b 分岐部①(北から)



SD4・SD4b 分岐部②(南から)



SD4・SD4b 分岐部① アップ(北から)



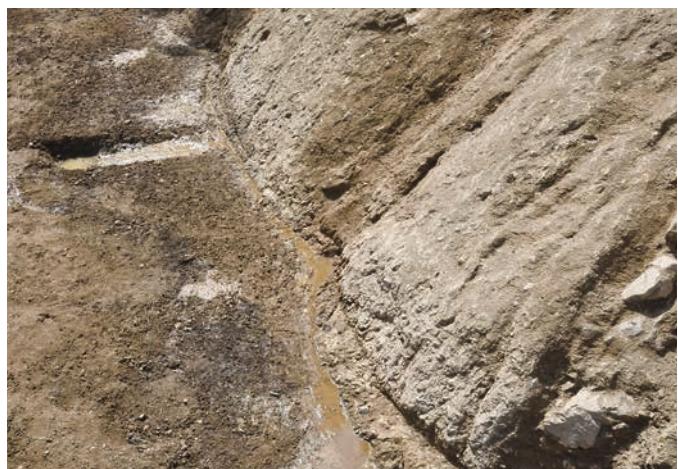
SD4・SD4b 分岐部③(西から)



SD5・SD6 セクション(北東から)



SD5・SD6 完掘(南東から)



SD5・SD6 完掘(北から)



SD5 完掘(南から)



SF7 セクションF(北東から)



SF7 セクションG(北東から)



SF7 検出状況(南から)



SF7 検出状況(南から)



谷 1 検出状況（東から）



セクション S（南東から）



セクション T（東から）



セクション U（東から）



セクション V（東から）



谷 2 検出状況（セクション Y）（東から）



谷 3 検出状況（セクション Z）（東から）



斜面岩盤 検出状況（北東から）



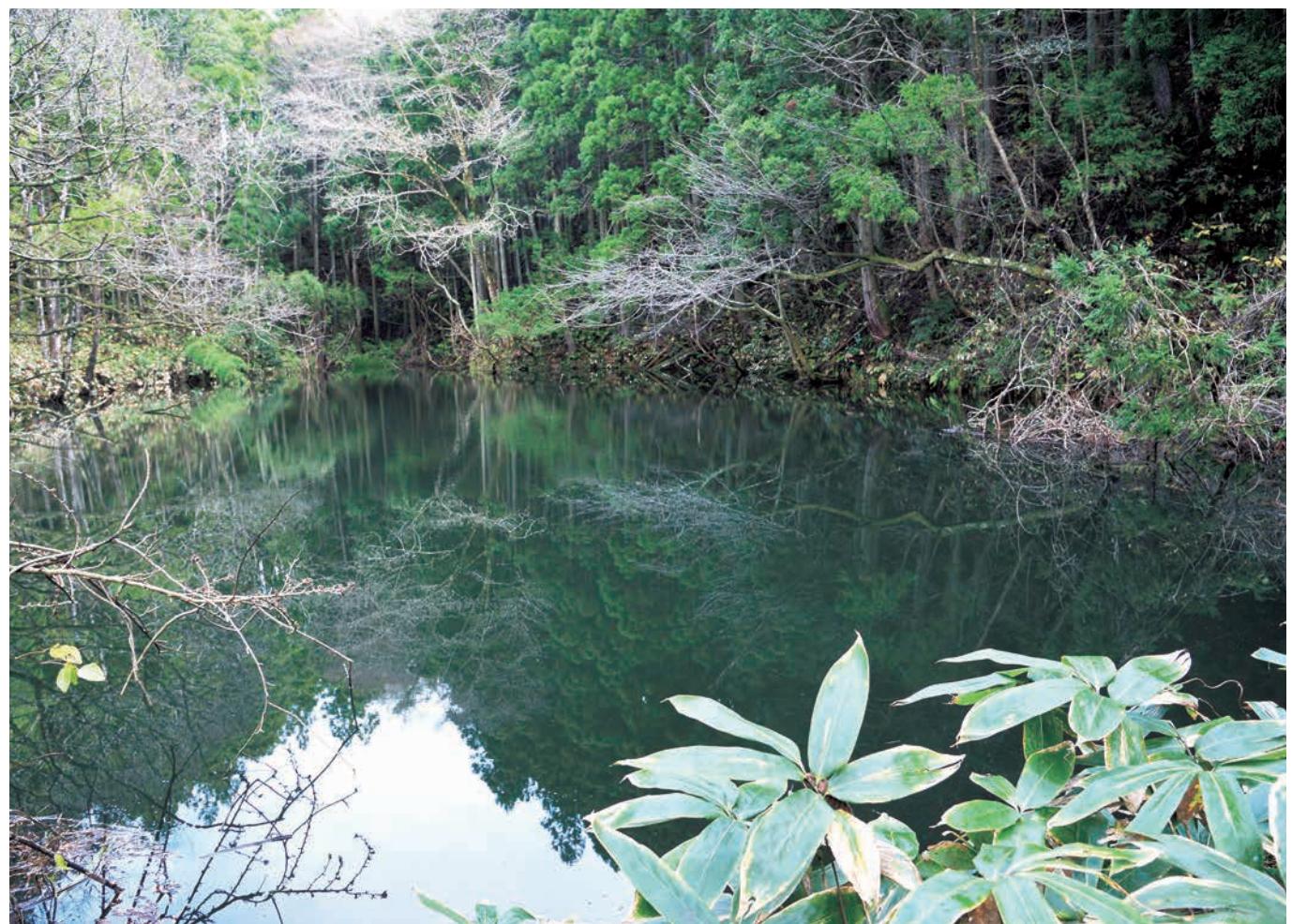
谷1南側 岩盤 岩質境界（北東から）



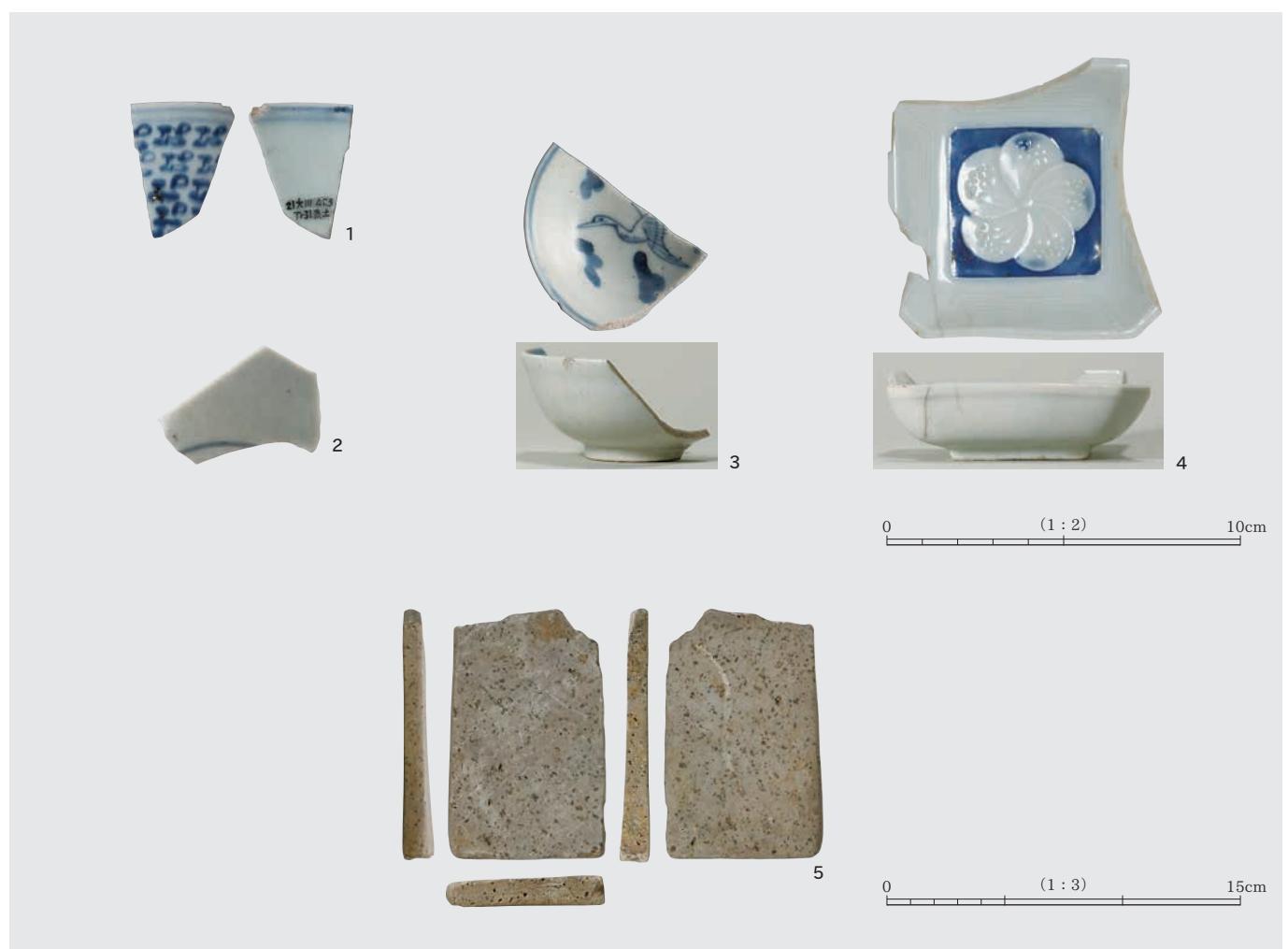
礫岩 疎らな岩質（東から）



礫岩 紹密な岩質（北から）



溜池（北西から）



## 報告書抄録

ふりがな	おおかわじょうあと							
書名	大川城跡							
副書名	日本海沿岸東北自動車道（国道7号朝日温海道路）関係発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第293集							
編著者名	春日真実（公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）、丹生泰雪・安孫子雅史・瀧口泰孝（株式会社島田組）							
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2022(令和4)年12月9日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおかわじょうあと 大川城跡	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 ふやらない 府屋地内	15212	638	38° 30' 49"	139° 32' 30"	20210506～ 20211014	2,551m <sup>2</sup>	日本海沿岸東北自動車道 (国道7号朝日温海道路) 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	遺構	主な遺物	特記事項			
大川城跡	城館跡	南北朝～安土 桃山(15世紀 ～16世紀)			大川城の断崖部。谷状地形を空堀と 想定して調査にあたったが、城館に 伴う痕跡は確認できず。			
	生産遺跡 (水路)	近世～現代	溝5条、 犬走り2条	磁器、石製品(砥 石)、鉄製品	城館跡地に造られた水田へ水を送る 水路および付帯施設。			
要約	大川城跡は、村上市北部の大川河口左岸付近に立地する山城で、戦国期に大川流域を支配した大川氏の居城である。15世紀後半の築城とされるが明確な資料は無く、慶長3(1598)年、上杉家の会津移封に従い廃城となる。本調査は大川城北端の断崖部を対象とし、谷状地形を切岸と想定して調査にあたったが、谷状地形の人为的な改変の痕跡は看取されていない。しかし、断崖部岩盤面の傾斜角が40°以上あり、自然地形そのものが大川城の防御施設の機能を保持していたと考えられる。廃城以後、居館跡地に造られた水田へ水を引くための水路および付帯施設として、断崖部の岩盤を掘削した溝5条、犬走り2条を検出した。出土遺物は、全て現代遺構と山肌を同時に覆う腐葉土層内からのものだが、15世紀後半～16世紀前半の青花椀が出土している。							

<p>新潟県埋蔵文化財調査報告書 第293集 日本海沿岸東北自動車道（国道7号朝日温海道路）関係発掘調査報告書2</p> <p style="text-align: center;"><b>大川城跡</b></p> <p>2022(令和4)年12月8日印刷 編集・発行 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2022(令和4)年12月9日発行 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986</p> <p>印刷・製本 株式会社ハイングラフ 〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号 電話 025(233)0321</p>
--